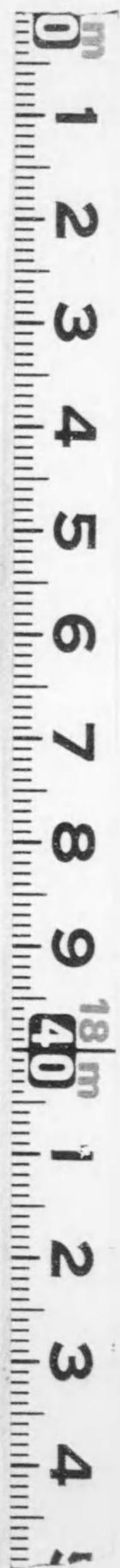


道會老莊列

特209

925



始



特209  
925



莊列

松村介石選



## 序

老莊列の教を、虚無恬淡にして、名利を離れ、物外に遊び、自然を楽しむ處に在る様に計り説く者がある、併し其れは一面で、他の一面には、處世の心得、爾我の心得、大人格を養成する心得を説いて居るのである。孔孟の教は、堯舜禹湯文武周公より發達して來て居るものであるから、王者の心得、若しくは官吏の心得を主として説いて居る。故に個人としての心得は、孔孟の教よりは、寧ろ此の老子の方が、多く深く且つ面白い。其の文字の洗洋たる處と、比喩の奇拔なる處と、無言の内に悟らさんとする處より、一寸解し難い、又た誤り易い處がある。併し一度之を解くの鍵を握ると、手に應じて分る事が出来る。

予輩は第一に道會四書を選した。第二に道會バイブルを選した、而して第三には此の老莊列を選した。之は修養上の順序であるからである。第一は良知良能に質して、

解り易い處より入らしめ、第二は精神修養より一轉して宗教に入らしめ、第三は神智靈覺の最も深い處を悟得せしめんが爲めである。其のつもりで、此の三書を読んで見給へ、所謂終生盡くるなき、道德と宗教と教育の材料を、此の三者より得ることが出来る。

此の内の莊子の方は、老莊書談より轉載したのである。此の老莊書談は、今より二十年前に著はしたものである。故にまだ山縣や、大隈や、桂の諸氏が、存在して居る時で、又其の時代に應じた註釋を加へて居るが故に、何だか古臭く見える廉もあらう。又今日の説き方の方が、餘程進んで居る様に思ふ。併し之を學ぶ上に於ては、少しも差し障へない。又た莊子と比較すると、老列の方は、比較的簡略になつて居るが、之は別に新たに書いたのと、又道會の教科書としては、此の位で充分であると思ふたからである。

諸君は怎ふも漢籍が難かしいと謂ふ。併し夫れば、漢籍を馬鹿にして居る今日の空

氣よりさういふ苦情を云ふのである。英書や獨書を學ぶに比較して見よ、文字は知つて居る文字だ、其の思想も、先祖代々より傳つて居る思想だ、少しく本氣になれば何んでもないのだ。西洋人が、今日新哲學として、舌を卷いて研究しつゝある此の東洋のクラシックを馬鹿にする様では本氣の沙汰でない。

己れの身にある寶を捨て、仕舞つて、人の物を羨むことは、變なものである。予輩は敢て西洋哲學や、西洋思想を馬鹿にするものぢやない。數十年來それに心酔して來たものだ。併し今日は我れに戻り、此の東西を融合して、茲に新文明を天下に闡らかんとして居るのである。怎うか諸君も誤解せんやうにして、我が一切の道會教科書を讀んでくれ給へ。

昭和三年十一月

選 者 識

道會老莊列目次

一、老子

第一章	(道可道云々)……………	一
第二章	(聖人處無爲之事云々)……………	一
同	(萬物作焉而不辭云々)……………	一
第三章	(聖人之治云々)……………	二
第四章	(挫其銳云々)……………	二
第八章	(上善若水云々)……………	三
第九章	(持而盈之云々)……………	三
同	(金玉滿堂云々)……………	三
第十四章	(視之不見云々)……………	四
同	(其上不皦云々)……………	五
同	(迎之不見其首云々)……………	五
第十五章	(古之善爲士者云々)……………	六
第十七章	(太上下知有之云々)……………	七

第二十章	(衆人熙熙如享太牢云々)	七
第二十一章	(孔德之容云々)	八
第二十四章	(跂者不立云々)	九
第二十五章	(有物混成云々)	九
第二十六章	(聖爲輕根云々)	一〇
第二十八章	(知其雄守其雌爲天下谿云々)	一一
第二十九章	(將欲取天下而爲之云々)	一二
第三十章	(善者果而已矣云々)	一二
第三十四章	(大道汎兮其可左右云々)	一三
第三十六章	(將欲歛之云々)	一三
第三十八章	(上德不德云々)	一四
第四十一章	(上士聞道云々)	一四
同	(明道若昧云々)	一五
第四十三章	(不言之教云々)	一五
第四十四章	(知足不辱云々)	一五
第四十五章	(大成若缺云々)	一六
第四十六章	(罪莫大於可欲云々)	一六

第五十四章	(善建者不拔云々)	一七
第五十六章	(知者不言云々)	一七
第五十七章	(天下多忌諱云々)	一七
第五十八章	(禍兮福所倚云々)	一八
第六十章	(治大國云々)	一九
第六十三章	(爲無爲云々)	一九
第六十四章	(其安易持云々)	一九
第六十七章	(我有三寶云々)	二〇
第六十八章	(善爲士者不武云々)	二一
第七十三章	(天之道不爭而善勝云々)	二一
第七十八章	(弱之勝強云々)	二一
第七十九章	(和大怨必有餘德云々)	二二
第八十一章	(信言不美云々)	二二
餘錄	(良賈者深藏而若虛云々)	二三
	(深山有寶云々)	二三

大鵬と斤鷄……………二四

堯と許由……………二五

莊子と魏王……………二七

孔子と弟子……………二八

子遊と子萇……………三一

闕鷄……………三六

季成と列子……………三九

子成綺と老子……………四五

陽子と老子……………四八

文惠君と庖丁解牛……………五一

梓慶と魯侯……………五四

桓公と輪扁……………五六

孫休と扁子……………五八

孔子と老子……………六三

三、列子

列子 (孔子遊於太山云々)……………六六

黃帝 第二 (我養虎之法云々)……………六七

同 (宋有狙公者云々)……………六八

周穆王第三 (宋陽里華子云々)……………七〇

仲尼 第四 (子夏問孔子曰云々)……………七二

同 (堯治天下五十年云々)……………七四

湯問 第五 (殷湯問於夏革曰云々)……………七六

力命 第六 (桓公遂霸云々)……………七七

說符 第八 (宋人有好行仁義者云々)……………七九

同 (秦穆公謂伯樂曰云々)……………八〇

同 (楊朱之弟曰布云々)……………八三

同 (楊朱曰云々)……………八四

同 (昔人有言云々)……………八五

同 (人有亡鐵者云々)……………八七

同 (昔齊人有欲金者云々)……………八八

# 「道會」老莊列

松村介石選

## 老子

### 第一章

道可道。非常道。名可名。非常名。

道は一で、實在である。故に儒道とか佛道とか云つて分つべきでない。

### 第二章

聖人。處無爲之事。行不言之教。

無爲と云つても、何もせずに遊んで居ることぢやない。機微に察して、其の起らざるに治める事だ。不言の教とは、口でなく、行で示すの意。



同

萬物作焉而不辭。生而不有。爲而不恃。功成而不居。夫唯不居。是以不去。

之は何でも自己を離れて、仕事をする事だ。自己心ある者は、一時評判されても、直ぐに衰へるものだ。

第三章

聖人之治。虛其心。實其腹。弱其志。強其骨。心を虚にして、腹に力を入れ、欲望を少くして、心膽を養ふ意。

第四章

挫其銳。解其紛。和其光。同其塵。湛乎似若存。鋭く見えるのが、不可ない。心のみだれて居るのが不可ない。ピカ／＼光るのが不可ない。故に己は塵でなくとも、其の中に居て目立たぬやうにして居ること。湛乎とは深い貌で、そうして居ても、何處か畏しい奴、

偉い奴、一物あゝ奴だき、思はれるやうなものになる貌。

第八章

上善若水。水善利萬物而不爭。處衆人所惡。故幾於道。之も前と同じやうな意味で、其徳を水に例へたので、争はずとは名利を争はぬ事だ。之が大人物の貌である。

第九章

持而盈之。不如其已。揣而鋭之。不可長保。持して之を盈つるさあるのは、ヒツクリ返して、之を盈たして持つと讀んだら解る。一ばい水を入れて持つて居れば、必ず溢れる。故に始めよりそんな事をせぬがよい。剃刀の如く鋭くして置いて、鞘か何かにはめて置いて、その刃の毀れる恐がある。それより大鈍の方が、大人物ぞといふ意。

同

金玉滿堂。莫之能守。富貴而驕。自遺其咎。功成名遂身退。天

之道の

之も前と同じやうな事だ。一體老子は、その文字が面白く、其の云ふ事が簡潔で、意味の深い處に價值のあるのだが、其の意味を云ふと、殆んど千徧一律だ。故に本當に一つを知れば、その百が解る。一つの鍵ですべてを開ける事が出来る。此處に天の道なりとあるのが面白い。春は咲き夏は實を結び、秋は熟し、冬は落つる。之をよく知つて居れば、人の世に處するの道は、炳乎たるもので、其の末路を汚すこともなく、笑を天下に遺すこともなく、執着心に失敗する事もなく、四季に應じて、スラリ／＼と、其の身を處する事が出来る。之を自由の人と云ふ、之を獨往の人と云ふ、之を天成の人と云ふ。

第十四章

視ミ之ノ不レ見ミ。名ヲ曰フ夷イ。聽キ之ノ不レ聞ク。名ヲ曰フ希キ。搏ト之ノ不レ得ズ。名ヲ曰フ微ミ。此レ三者ハ不レ可ク致ス詰ス。故ニ混ニ而シ爲ス一ト。

之は道の本體を指すので、この道は即ち神の働さも、神そのものと見てもよい。夷と云ふのは、平たい目立たぬ事、希と云ふのも、希薄で、一寸解らぬ事、微は捉へ處のないから、微妙の微だ、致詰すべからずとは、つまりドウとも云ひやうがないが、兎に角一物であつて、萬有を支配して居るものとの事。

同

其ノ上ニ不レ皦ク。其ノ下ニ不レ昧ク。繩ノ繩ノ兮ハ不レ可ク名ズ。復ニ歸ス於テ無ク物ニ。是レ謂フ無ク狀ノ之ノ狀ノ、無ク象ノ之ノ象ノ。是レ謂フ惚ク恍ク。

之も前と同じやうな事で、其の上にかゝつて居るのだが、どうも皦でない。其の下に隠れて居るのだが、其れでもよく解る。繩々として何處にでもあるが、何かと見れば無物で無くなつて了ふ。無狀だけれども狀がある。無象ちやけれども象がある。惚恍、ホーッとして捕へざるないが、確かに實在して居る。老子は此處までは解つたが、然し之より眞の宗教に入り、この物を人格的に解し、之と交り、之と語り、之と親子や君臣の關係を結んで行くと云ふ處までには、得行かなかつた。この點より見ると、我黨の方が、老子以上である。

同

迎ム之ノ不レ見ミ。其ノ首ヲ隨フ之ノ不レ見ミ。其ノ後ニ執リ古ノ之ノ道ヲ以テ御ス。今ハ有ク能ク知ル。古ノ始ニ是レ謂フ道ノ紀ト。

之も前と同じく道の事を云ふのである。前から行つても頭が見えず、後から行つても其の尻尾が見えず、兎

云ふて、無いのかと思ふと、古もあり、今もある、而して此の古今に通ずる道を執つて天下を治める、之が聖人て、その天下を治める道、これを道紀と云ふのである。

第十五章

古之善爲士者、微妙玄通、深不可識。夫惟不可識、故強爲之。豫兮若冬涉川、猶兮若畏四鄰、儼兮其若客、渙兮若冰之將釋、敦兮其若樸、曠兮其若谷、渾兮其若濁。

之は大人物の資格を云ふのである。大人物はそんなに容易に凡俗に知れるものでないが、一寸之を形容すると、豫と云ふのは猶豫の豫だ、川を渉るのは寒いから、一寸猶豫して居るやうに見える。猶も同じ意、畏四隣と云ふのは、四方を見て事をなす形、人から見ると、臆病に見える、優柔不斷に見えるが、中々用意周到なものであるとの事。嚴として御客のやうな顔して居る事もあるし、渙として氷の溶けんとするやうな、春のやうな所もあるし、敦として樸訥の田舎者のやうにも見えるし、曠として谷の如く物を容れ、渾として濁つて居るやうにも見える。そんなに鋭かつたり、清かつたり、ハキ／＼物が出来たりするやうなもの、皆小型だ、世人には立派に見えるが大物ではない。老子は何時も、こんな處に目をつけた。故に大人物の資格を養はんと欲すれば、恐くは老子の書に勝るものは天下に無からう。

第十七章

太上不知有之、其次親之譽之、其次畏之、其次侮之。

之は人君の事を云ふのである。一番偉い人君は、無爲にして天下を治めて居るから、一向民が其の偉さも、有難さも知らない。只君の有ると云ふ事だけ知つて居る。これが一番偉いのである。第二流の人君は、民が親しみ譽めて、實に偉い人君だと感服して居る。第三流の人君は、實に恐しい君ぢや、恐れ入つた者だ、立派なものだと云つて、民が畏服して居る。その次になると、下々より侮られて馬鹿にされるやうになつて居る。老子の云ふ事は千偏一律だが、之を味ふと、處世の百般に應用する事が出来る。

第二十章

衆人熙熙、如享太牢、如登春臺、我獨泊兮其未兆、如嬰兒之未孩、乘乘兮若無所歸、衆人皆有餘、而我獨若遺、我愚人之心也哉、沌沌兮、俗人昭昭、我若昏昏、俗人察察、我獨悶悶、澹兮其若海、飂兮似無所止。

熙々と云ふのは、嬉しがつて居る事、太牢は大御馳走、皆が喜んで居るのに、予は一人澹白で何も嬉しい事も、悲しい事も無い。孩とは笑ふ事で、丁度子供が未だ笑ふ處まで行かない貌である。乗々とは、アラ／＼として歸する處なく、何處へ行くともなく、ホヤつとして居る事。次に衆人は餘り有りて、知慧もあり、學問もあり、力もあると云つて威張つて居るが、俺には何も無い。何んだか皆忘れて了つた。馬鹿者の心ぢや。沌々とは暗い貌、俗人は昭々乎として、何もかも知つて居る。俺は何もかも知らないやうに見える。俗人は察々として才氣鋭發して居る、然し俺は悶々と、心が門の外に出ないやうな貌で居る。澹は靜で、治つた海の如く、颺は風の吹く貌で、何處へ行くか解らないと云ふやうなもので、之も千偏一律の言だが、然し之の心を捕へる事が難しい。この心を捕へたら大人物となれるのであるから、この心を捕へさす爲に、何遍も繰り返して之を言ふのである。

第二十一章

孔徳之容唯道是從。道之爲物惟恍惟惚。惚兮恍兮。其中有象。恍兮惚兮。其中有物。窈兮冥兮。其中有精。

孔とは大と云ふ事で、大徳の貌で、矢張り大人物の資格を云ふのである。大人物は、只だ道を體得するとこゝろにある。そんなら道とは何ぢやと云ふと、恍たり惚たり、トント解らないが、然し薩張り解らんぢやない、

其の中に萬象が動かされて居る。トント之と云ふて解らぬが、確かに或る物が嚴存して居る。窈たり冥たりで、暗くぼんやりして居るが、確かに其の中に一つの物が居る。之と一體となる、之が孔徳者の容である。

第二十四章

跂者不立。跨者不行。自見者不明。自是者不彰。自伐者無功。自矜者不長。

跂つとは、踵をあげて居ること、そんな事しては、長く立つて居れぬ。大股に跨つて行く奴は、長くは行けない。自ら見はして、己はこんなもんだ、あんなもんだと云ふ奴は、つまり人から尊まれないから、そのまゝ消えて了ふ。自ら正しいとして威張る奴は、誰も譽めてくれない。即ちあらはれない。自ら威張る奴は、徳の無い奴だ。自ら譽める奴は、一寸俗人を感心せしめるが、長くはないぞ。今や世上を顧みると、この人許りだ。一寸出て来て、直ぐに消えて了ふのは、當然である。

第二十五章

有物混成。先天地生。寂兮寥兮。獨立而不改。周行而不殆。

可<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>天下母<sup>一</sup>。

吾<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>其名<sup>一</sup>。字<sup>レ</sup>之曰<sup>レ</sup>道。強<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>之名<sup>一</sup>曰<sup>レ</sup>大。大曰<sup>レ</sup>逝。逝曰<sup>レ</sup>遠。遠曰<sup>レ</sup>反。

之は又道を云ふのである。この道を云ふ處は、別につゞけて置くとよいのだが、この書では、其の章に従て來たから、別々にしなかつた。元來此の老子の書も、古より傳つて來たのだが、もとより斯んな章なぞは無かつたのだ。又た後になつて更に作つて入れたのもあらうし、色々雑つて居るだらうが、今は其等を此に論ぜぬ。混成と云ふのは彼此と指すべきものなく、混は渾で、全體と云ふ事で、萬物は皆此の道より出て來て居る、獨立とは絶對の事で、不改とは變化しない貌、周行とは何處にでもある貌、不殆とは滅せざる貌、然し萬物は皆此の道にしたがつて出て來て居る。故に天下の母だ。何しろ斯う云ふものが嚴存して居るが、この物は何ぞと云へば、別に名もないが、先づ道と云ふて置くのぢや。或は大と云つても可い。或は逝と云つても可い、何處へでも逝つて居るから。遠と云つても可い、無限に渡つて居るから。反と云つても可い、始終循環して居るから。

第二十六章

重<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>輕根<sup>一</sup>。靜<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>躁君<sup>一</sup>。  
是以<sup>レ</sup>君子終日行不<sup>レ</sup>離<sup>レ</sup>輻重<sup>一</sup>。雖<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>榮觀<sup>一</sup>。燕<sup>レ</sup>處<sup>一</sup>。超<sup>レ</sup>然<sup>一</sup>。

重とはサツト重く構へて居る奴。此奴がいつも、軽く飛び廻る奴を使ふて居るのだ。靜はサツトしてゐる。此奴がいつも躁ぐ奴の指揮官となつて居る。輻重とは、色んなものを車に積んで居るもの、そいつを持つて居て、輕や躁に與へて働かして居る。榮觀とは、仕事の出來て成功する時、皆が萬歳を叫び、祝杯を傾けて居る時、自身は只だニコツとして居る許りで、獨り超然として居る。之が君子の貌だ。

第二十八章

知<sup>レ</sup>其雄<sup>一</sup>守<sup>レ</sup>其雌<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>天下谿<sup>一</sup>。常<sup>レ</sup>德不<sup>レ</sup>離<sup>一</sup>。復<sup>レ</sup>歸<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>嬰兒<sup>一</sup>。  
知<sup>レ</sup>其白<sup>一</sup>守<sup>レ</sup>其黑<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>天下式<sup>一</sup>。常<sup>レ</sup>德不<sup>レ</sup>忒<sup>一</sup>。復<sup>レ</sup>歸<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>無極<sup>一</sup>。  
知<sup>レ</sup>其榮<sup>一</sup>守<sup>レ</sup>其辱<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>天下谷<sup>一</sup>。常<sup>レ</sup>德乃<sup>レ</sup>足<sup>一</sup>。復<sup>レ</sup>歸<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>樸<sup>一</sup>。

此處の雄を知るとあるところに重を置かれらぬ。雄を知つて居るのだ、けれども、その雄にはならない、其の雌になつて居る。そうすると、水の底きに就く如く、皆が此方にやつて來るので谿となる。そこで己の徳が何時までも癢らない。嬰子の如く、人に愛せらるゝ許りである。又た白を知ると云ふ處に重きを置くのだ、知つて居ながら、表に出でず暗い處に居るのだ。そすと天下の模範となつて、人が自然と懐く、無極とは、天地自然の無欲の處である。谷とあるのは空くして萬物を容れる貌、谿とは水の注ぎ來る處、樸も、無極も、嬰兒も、みな同じ無欲の意だ。或書に深山に寶有り、寶に心なき者之を拾ふと、老子が云つたと云ふ事が書いて

あるが、此一言丈でも老子の極意が能く解る。

第二十九章

將欲取天下而為之。吾見其不得已。天下神器不可為也。為者敗之。執者失之。

天下を取つて一仕事したいと云ふ奴は、到底天下を取る事が出来ない。天下は神器だ。人為でどうする事も出来ない。只だ此の國を愛へ、此の民を思ひ、天の使命を自覺して、どうか之を治めたい、之を救ひたいと思ふ心より、出て来るものにして、はじめ 天下を得る事が出来る。色々我欲私欲の爲に出て来る奴は、しばらく天下を取つても、直きに失つて了ふ。

第三十章

善者果而已矣。不敢以取強焉。果而勿矜。果而勿伐。果而勿驕。果而不得已。果而勿強。物壯則老。是謂不道。不道早巳。

果は果斷の果である。斷行する事だ。斷行して、何時までも、其れを持つて行かないのだ。即ち強を執らずだ。矜つた、驕つたりするやうな事では駄目。物壯んなれば必ず老ゆで、其れは必然の道理だ。之も老子の常套語であるが、文字と文章とが面白いから、之を採て置く。

第三十四章

大道汎兮其可左右。萬物恃之以生而不辭。功成不居。衣被萬物而不為主。

汎とはひろい形、左右すべしとは、一局部に限らず何處にでも運行して居るとの事。衣被してとは、人間に衣物着せて温く守る貌。總て其の御蔭で生々育々して居るけれども、一向恩を着せたやうな顔はせぬとの事。

第三十六章

將欲歛之。必固張之。將欲弱之。必固強之。將欲廢之。必固興之。將欲奪之。必固與之。是謂微明。

盛んなるものは必ず衰へ、猛きものは遂には亡ぶのだ。人間の弱點此處にある。之を考へて仕事をする。之

を微明と云ふのである。

第三十八章

上徳不徳。是以有徳。下徳不徳。是以無徳。下士者聞其言。中士者見其行。上士者知其心。

徳ならずと云ふのは、別に徳人であるぞと云ふ振もせず、又心にそう思はん、其處に徳があるのだ。どうか徳人であるやうに見せたい、徳を失はないやうにしたいと云ふ、其の名譽心ある者は、本當の有徳者と云へない。言ひ聞いて直ぐに信するものは下。行を見なければと云ふが中。乃ち大奸は忠に似たりと云ふ事があるから、當にならん。唯だ其の心を知るに如かずである。

第四十一章

上士聞道。動而行。中士聞道。若存若亡。下士聞道。大笑之。不笑不足以為道。

俗人は道を聞くと、开んな迂な事は、活世界に行はるものでないと笑ふ。然し結局を見る、之でなければ、

つまり本當の成功、本當の發達、本當の隆盛は期し難いのである。

同

明道若昧。夷道若類。進道若退。上徳若谷。太白若辱。廣徳若不足。建徳若偷。質直若渝。大方無隅。大器晚成。大音希聲。大象無形。

之も幾度か前に出て居ると同じ意味、類は結び目のある事、ゴツ／＼して居る。偷と云ふのは、怠けて居る貌。希聲と云ふのは音の無い事。無形と云ふのは、物が有るが、捉み所の無いもの、即ち道である。

第四十三章

不言之教。無爲之益。天下希及之。

之も前に出て居るものを能く見れば解る。

第四十四章

知<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>辱<sub>レ</sub>。知<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>殆<sub>レ</sub>。可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>長<sub>レ</sub>久<sub>レ</sub>。

止まると云ふのは、無茶苦茶に、盲目滅法に行かぬ貌。

第四十五章

大<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>缺<sub>レ</sub>。其<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>敝<sub>レ</sub>。大<sub>レ</sub>盈<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>冲<sub>レ</sub>。其<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>窮<sub>レ</sub>。大<sub>レ</sub>直<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>屈<sub>レ</sub>。大<sub>レ</sub>巧<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>拙<sub>レ</sub>。大<sub>レ</sub>辯<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>訥<sub>レ</sub>。

缺けるが如しとは、何處かに抜けた處あるやうな形、沖しきが如しとは、一杯に入つて居ても無いやうな風、屈するが如しとは、直を示さぬ貌、總て皆老子獨特の教。

第四十六章

罪<sub>レ</sub>莫<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>。禍<sub>レ</sub>莫<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>。咎<sub>レ</sub>莫<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>。得<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>常<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>。

之も前を受けて同じ意味。

第五十四章

善<sub>レ</sub>建<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>拔<sub>レ</sub>。善<sub>レ</sub>抱<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>脱<sub>レ</sub>。子<sub>レ</sub>孫<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>祭<sub>レ</sub>祀<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>輟<sub>レ</sub>。

こゝに善と云ふのが面白い。人の細工でやるんぢやない。自然に善道をもつて建てたもの、松の木のように、大風にも抜けない。抱くものも同じ事。何でも人の細工でなく、自然に大きくなる形。徳をもつて生長したものは、繁昌して子孫に其の祭が絶えない。

第五十六章

知<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>。言<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>。塞<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>兌<sub>レ</sub>。閉<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>門<sub>レ</sub>。挫<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>銳<sub>レ</sub>。解<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>紛<sub>レ</sub>。和<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>光<sub>レ</sub>。同<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>塵<sub>レ</sub>。是<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>玄<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>。

兌とは耳目鼻口である。之も此處まで講釋して來た事を味へば、直ぐに解るだらう。

第五十七章

天<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>忌<sub>レ</sub>諱<sub>レ</sub>。而<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>彌<sub>レ</sub>貧<sub>レ</sub>。民<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>器<sub>レ</sub>。國<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>滋<sub>レ</sub>昏<sub>レ</sub>。民<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>技<sub>レ</sub>巧<sub>レ</sub>。奇<sub>レ</sub>物<sub>レ</sub>。



滋起ますくおこる法令はふれい滋彰ますあきら彰あきら盜賊たうぞく多有おほくあり。

故聖人云。我無爲われなクシテ而民自化たみおのづからたせシク。我好静われこのミテせい而民自正たみおのづからたせシク。我無事われぶ而民自富たみおのづから。我無欲われむ而民自樸たみおのづからはく。

愚諱とは、民の爲にア、せい、コーせい、之はわるい、あればいかぬと、八蓋敷く云ふ事。民の爲に謀るのだが、其を守つて居ると、貧乏になつて了ふ。利器は良いが、其に頼つて居ると、國家が本當に發達しない。其の弊を云ふと、汽車や電車が出來てよいが、人間が運動せぬから弱くなる。技巧は良いが、其を餘り獎勵して居ると、實用でない變なものが出來て來て、人民が遊びに耽つて駄目になる。總て天地の如く、自然に成長し、自然に化する事を心掛ければならぬ。

第五十八章

禍兮わざはひ福所倚さいはひ。福兮わざはひ禍所伏たれカレシ。執知たれカレシ其極セノキ。其無正なキマダマル耶カ。正復せいまた爲奇なりキト。善復ぜんまた爲妖なりキト。民之迷たみのまよひ。其日固まことニ已久矣すでニヒキシ。

之も前と同じ意味で、正は正で正しいが、餘り正々々ばかり云ふて居ると、其が奇になつて了ふ。善もよいが、餘り善々々ばかり云ふて居ると、其れが妖となつて了ふ。

第六十章

治をさむル大國ハたい。若烹せとシ小鮮ニルガセウ。

小鮮は小さい魚の事だ。餘り攪き交ぜると、潰れて了ふぞと云ふ事。

第六十三章

爲無爲なシ。一ヒ事無事コトトシガ。味無味あぢはフ。大だい小多トシテセウ少チタトスセウ。報むく怨ユル。以ユル德ニウラ。圖ハカリ難ナン於ニ其ソノ易イニ。爲な大ス於ニ其ソノ細さい。天下てん難事なん。必かならず作ス於ニ易イニ。天下てん大事だい。必かならず作ス於ニ細さい。是以これヲ聖人じん終不ハツ爲ナ大ス。故能成ゆえニ其大ニ。夫輕諾ゆい必寡ハ信ニ。多易た必多ハ難ニ。是以これヲ聖人じん猶難カ之ニ。故終無ゆえニ難ニ。

之も前の講釋を吞込めば解るでせう。考へて見給へ。

第六十四章

其安易持。其未兆易謀。其脆易破。其微易散。爲之於未<sub>レ</sub>有。治之於未<sub>レ</sub>亂。合抱之木生於毫末。九層之臺起於累土。千里之行始於足下。

其の治つて居る時には持し易いものだ。故に其の時に、之を續けて維持する工夫をして居ればよい。捨て、置いて、大騒動になつてから治めると云ふのは難しい。全てそう云ふ意味を云ふのである。

第六十七章

我有三寶。一曰慈。二曰儉。三曰不敢爲天下先。慈故能勇。儉故能廣。不敢爲天下先故能成器長。今舍慈且勇。舍儉且廣。舍後且先。死矣。

慈故に勇とは、鶏が其の慈愛より大勇を振ひ來るところなどを謂ふ。儉と廣とは、儉約して居ると、其の金で廣く物を施す事が出来る。天下の先とならず、常に謙遜して居る奴は、自然に生長する。之の三寶を守らぬ奴は、きつと終ひには滅すると云ふ意味。

第六十八章

善爲士者不武。善戰者不怒。善勝敵者不爭。善用兵者爲之下。是謂不爭之德。是謂用人之力。是謂配天。古之極。

不武と云ふのは、武道の心得が要らぬと云ふのでは無い。無暗に威張らぬ事を云ふ。天に配すと云ふのは、天道に合する事、古の極なりと云ふのは、古の道の極致であると云ふ事。

第七十三章

天道不爭而善勝。不言而善應。不召而自來。繹然而善謀。天網恢恢疎而不失。

言はずして善く應ずとは黙つて居ても善く事物に順應して行く。無理に召かんでも、先方から來て呉れる。繹然とは、廣い貌、ホーツとして居るが、そこに微妙な謀がある。だから、天の張つて居る網は、大きく疎に見えるが、どんな魚でも、皆之に掛る。

第七十八章

弱之勝強。柔之勝剛。天下莫不知。莫能行。之もモ一解るでせう。

第七十九章

和ワスレドモ大怨大必一有二餘怨一。安いづく可二以レ爲レ善一。是以レ聖人執二左契一而不責二於人一。有德徳司レ契契。無德徳司レ徹徹。天道無親。常與二善人一。

大怨を和すれども餘怨ありとは、已に大怨を起すやうになれば、仲裁で直つても餘怨が有つていけない。初めより大怨を起さぬやうにするのが宜しい。左契とは證文だ。約束をしても、錢を借しても、黙つて夫を見せれば、八釜敷く云はんでも先方が頭を掻く。徹とは徹底の事だ。何處までも八釜敷くこいせい、ア一せいと云ふと、徳を損ずるのみならず、却つて其の事が行はれない。

第八十一章

信言不美。美言不信。善者不辯。辯者不善。知者不博。博者不知。信は信實の信と見て、宜しい。知るものと云ふのは、本當に物を知つて居るものは、そう何でも彼でも知ると云ふ譯には行かん。何でも彼でも知つて居ると云ふ奴は、つまり何でも彼でも知つて居らんと云ふ奴ぢや。

餘錄

良買者深藏而若虛

大きな商賣人は、店に並べて多きを街ばないの意。

深山有寶。無心於寶者拾之

無暗に金々々と云ふて、金ばかり考へて居る奴は、却つて貧乏で、只正直に勉強して、心を商工に用ひて居る者は自然と富んで行く貌。

(以上は他書に老子の言としてあり。教訓として妙なれば、此處に採録して置く。)

莊子

大鵬と斥鷃 (逍遙遊)

有鳥焉。其名爲鵬。背若泰山。翼若垂天之雲。搏扶搖。羊角而上者九萬里。絕雲氣。負青天。然後圖南。且適南冥也。斥鷃笑之曰。彼且奚適也。我騰躍而上。不過數仞而下。翱翔蓬蒿之間。此亦飛之至也。而彼且奚適也。

【註一】扶搖。天空を吹く強き風のことなり

【註二】羊角。羊の角のやうに舞て上に昇ること

【註三】圖。南冥に行

【註四】斥鷃。斥は尺と通ず、小鳥を云ふ。一説に鶉ともあり

彼れ取つて代るべしと睨視し、大丈夫將に此くの如くあらざるべからずと奮起し、こゝに驚天動地の大業を企つ、正に是れ大鵬の意氣なるべし。山縣狂介、大隈八太、彼れ何者ぞ、眇たる一介の書生のみ。然れども其風雲に乗じ、羊角して上り來るときには、雲氣を絶ち、青天を負ひ、今や公侯の位に坐し、一は日本廟堂の頭腦

となり、一は宇内環視の英雄となり、雷動風驅、龍飛虎歩、功天地に均しく、明日月に並ぶ、正に以て大鵬に比すべきなり。憶昔共に與に紙鳶を飛ばし、共に與に竹馬に乗り、共に與に軒輕せしもの、今や夫れ何處に在る、野馬や、塵埃や、蝸や、鸞や、彼れ終に見るべからず、水の流れと人の行末とは、實にも逆睹すべからず、窮達の跡、榮辱の境、奚んぞ夫れ太甚しきや、是れ大鵬の心也。

其れ然り然れども人生を達觀して、眼を天地と永遠に馳せ來るときは、彼れ大鵬何者ぞ。塑を横へて詩を賦す、固に一世の雄也。而かも今安に在る哉、渺たる滄海の一粟、空しく蜉蝣を天地に寄すのみ。鶯帽高く聳ゆるも、二尺に満たず、鳶肩如何に揚ぐるも、一丈を越ゆべからず。庭園何物ぞ、殿堂何物ぞ、高く山上より瞰視し來れば、蟻穴のみ、蟻窠のみ、此天地に坐し、此永遠に宿し、彼れ將た何をか誇らんとす。彼れ垂天の翼を持し、泰山の背を有す、而かも之れあるが故に、積風を待たずんば動く能はざるにあらずや。百里に適くものは宿に糧を春く、千里に適くものは、三月糧を聚む、何んぞ其不自由なる。請ふ我れを見よ、莽蒼に適くものは、三餐して反るも、腹猶ほ果然たり、我れ騰躍して上る、數仞を過ぎずして下り、蓬蒿の間に翱翔す、此れ亦た飛の至れるもの也。行かんと欲すれば則ち行き、止まらんと欲すれば則ち止る。奚んぞ九萬里を以て南することをやせん。噫嘻かれ大鵬何んぞ汝の不自由なる。虛榮、我が願にあらず。自得、我が學ぶところなり。大小何者ぞ、蟲鷃何んの差ぞ、是れ斥鷃の心也。

堯と許由 (逍遙遊)

堯讓<sup>レ</sup>天下於許由<sup>一</sup>曰。日月出矣。而燭火不<sup>レ</sup>息。其於<sup>レ</sup>光也。不<sup>レ</sup>亦難<sup>レ</sup>乎。時雨降矣。而猶浸灌。其於<sup>レ</sup>澤也。不<sup>レ</sup>亦勞<sup>レ</sup>乎。夫子立<sup>レ</sup>而天下治。而我猶尸<sup>レ</sup>之。吾自視缺然。請致<sup>レ</sup>天下。許由曰。子治<sup>レ</sup>天下。天下既已治也。而我猶代<sup>レ</sup>子。吾將爲<sup>レ</sup>名乎。名者實之賓也。吾將爲<sup>レ</sup>賓乎。鷦鷯巢<sup>レ</sup>於深林。不<sup>レ</sup>過<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>枝。偃鼠飲<sup>レ</sup>河。不<sup>レ</sup>過<sup>レ</sup>滿<sup>レ</sup>腹。歸休乎君。予無<sup>レ</sup>所用<sup>レ</sup>天下<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>上。

【註一】許由 人名にて字仲武、箕山に隠れて山に依つて食ひ、河に就いて飲む、堯其賢なるを知りて、帝位を譲らんとす。

【註二】燭火 炬火と同じ。

【註三】鷦鷯 鳥の名みそ

【註四】偃鼠 腹前の鼠、或はむぐらもち。

凡そ天下の事、かの真人より之を觀べ、噴飯に値せざるもの幾千ぞ。高閣雲を破り、庭園數丁に跨る、實に一代の偉觀なり。而かも坐するところば膝を容るゝに過ぎず。歩するところば尺餘を出です。鷦鷯深林に巢ふも一枝に過ぎず。偃鼠河に飲むも腹に滿るに過ぎず。輪奐の美、樹石の妙、驚くものあるが爲めに其類を長くし、賞むるものあるが爲めに其鼻を高くす。若夫れ驚くものなく、賞むるものなからんか、折角の經營も徒勞にや歸せん。人生畢竟虛榮の奴のみ。堯や既に之を悟す、於此乎 來て天下を許由に讓る。許由も亦た既に之を悟

す。於此乎、天下を用て爲すところなしとなす。嗚呼斯心あり、然後天下を有つべく、萬衆を御すべし。深山に實あり、實に心なきもの之を拾ふ。ウエアストルの落ち、ガーフホルドの騰る、皆此例に外ならず。古今一理、萬國一揆、莊子の訓戒は、奇にして正、虛にして實、目あるもの視るべく、耳あるもの聽くべし。

莊子と魏王 (山木)

莊子衣<sup>レ</sup>大布<sup>一</sup>而補<sup>レ</sup>之。正<sup>レ</sup>縻<sup>一</sup>係<sup>レ</sup>履<sup>一</sup>。而過<sup>レ</sup>魏王<sup>一</sup>。魏王曰。何先生之憊邪。莊子曰。貧也非<sup>レ</sup>憊也。士有<sup>レ</sup>道<sup>一</sup>德<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>憊也。衣<sup>レ</sup>弊<sup>一</sup>履<sup>レ</sup>穿<sup>一</sup>貧也。非<sup>レ</sup>憊也。

【註一】正 縻 縻は帶にて、帶を結ぶをいふ。

【註二】係 履 履の破れたるを以て、之に繩を掛けたるなり。

【註三】憊 邪 憊はつかると讀み、精神の衰弱せること。

貧なり憊にあらず。何んぞ其語の奇警なるや。赤符を携へて汽車に駕し、下等の客となりて船底に伏せば、人直に指して憊と爲す。而かもスピノザの旅し、クライアの航す、皆斯の人にあらざるはなし。絹帽を冠し、金鎖を懸け、揚々として海陸に濶歩す。而かも心事や實に憊むべく、權門に媚び、富豪に佞し、身を賣り、節

を驚き、夫の醜業婦に類するもの、所在皆是れならざるはなし。盜跖長範の徒、猶ほ能く上等に駕す。豈唯り金錢をのみ貴しとせんや。男子よろしく其意氣を壯ならしむべし。破襜とフロツクコート、將た何の差ぞ、馬上と徒歩、將た何んの遠ぞ。鄆夫金あり借馬以て馳するに足る。痴漢錢あり、損料以て燕尾服を着するに足る。若夫れ衣るべくんば、其心に錦を衣るべし。若夫れ馳すべくんば、其志を天下に馳すべし。君子固より窮す、大丈夫豈憊せんや。柎梓を得れば忽ち王長となり、柎棘を得れば則ち悼慄す。是れ皆小人の爲すところ。首陽山に餓死するも猶ほ仁に志し、剖心身を殺すも猶ほ忠を忘れず、是れ大丈夫世に處するの神魂なり。嗟乎貧と憊とを混するもの、豈魏王のみと謂ふべけんや。滔々たる世上、多くは皆其人のみ、此時に當りて莊子を讀む、千載知己存すの感あり。

孔子と弟子

孔子窮於陳蔡之間。七日不火食。藜藿不糝。顔色甚憊。而弦歌於室。顔回擇菜。子路子貢相與言曰。夫子再逐於魯。削迹於衛。伐樹於宋。窮於商周。圍於陳蔡。殺夫子者無罪。藉夫子無禁。弦歌鼓琴。未嘗絕音。君子之無恥也若此乎。顔回無以應。入告孔子。孔子推琴喟然而歎曰。由與賜細人也。召而來。吾語之。

子路子貢入。子路曰。如此者可謂窮矣。孔子曰。是何言也。君子通於道之謂通。窮於道之謂窮。今丘抱仁義之道以遭亂世之患。其何窮之爲。故內省而不窮於道。臨難而不失其德。天寒既至。霜雪既降。吾是以知松柏之茂也。陳蔡之隘。於丘其幸乎。孔子削然反琴而弦歌。子路扞然執干而舞。子貢曰。吾不知天之高也、地之下也。古之得道者。窮亦樂。通亦樂。所樂非窮通也。道之德於此。則窮通爲寒暑風雨之序矣。故許由娛於穎陽。而共伯得乎丘首。

- 【註一】 不火食 煮燒きしたるものを喰はぬこと。
- 【註二】 藜藿 藜、藿、あかざのあつもの。
- 【註三】 不糝 糝は獸肉とを和して煎たるもの。
- 【註四】 喟然 溜息を吐く時、の形容なり。
- 【註五】 扞然 奮ひ舞ふの形容なり。
- 【註六】 不糝 糝は

孔子が陳蔡の間に居たとき、貧乏して煮たものも啖られず、野菜のみを食ふて、顔色甚だ憊で居た。然し元氣は却々旺盛なもので、貧乏を何んとも思はず、琴を鼓して歌て居ると、顔回が其側に野菜を擇んで、食事の仕度を做して居た。スルト子路と子貢とが、顔回に向て「何んの事だ、到るところ用ゐられず、諸處を流浪して、

到頭二んに窮して仕舞つた。而かも猶ほ意地を張つて、琴を鼓して平氣を装ふて居る。君子の恥なきこと此の若きか」と呟いた。ソコで顔回は馬鹿な奴ぢや、夫子の心を知らぬのも太甚しいと思ふたが、己れが訓戒するよりも、寧ろ夫子に諭して貰はんと考へ、直に之を孔子に告げた。時に孔子は猶ほも琴を鼓して居られたが、琴を措て嘆息し、「ア、まだ子路と子貢とは小人である。よし／＼呼んで来い」とて、呼び入れられたが、子路はまだ其不平が止まぬから、来るや否や、「小子の申す通り窮すと謂つても差障は御座りませぬ」と遣つ着けた。時に孔子は「お前等は何を言ふ、君子は道に通ずるを道と謂ひ、道に窮するを窮と謂ふ。今予は仁義の道を抱て之を曲げず、正に通じて居るのである。亂世に遭ふて貧乏はして居るが、窮ては居らぬ。内に省みて道に窮せず、困難に臨んでも君子の徳を守つて居る。見よ天寒くして霜雪降れば、草木皆凋へども、獨り松柏のみは茂つて居る。君子でなくば此の陳蔡の隘に遭へば、必ず凋むに相違ないが、予れは斯く悠然琴を鼓して楽しんで居る。此困難は、偶々我れを試験して級第せしめたのじやから、予は寧ろ幸福に感ず」と謂ひながら、更に削然琴を反して弦歌せらるゝと、子路も大に悟したるものと見へ、屹然干を執て舞ひ始めたから、子貢は感嘆して、吾れは天の高きも、地の下きも知らなかつたが、今にして始めて之を知る。如何にも古の道を得るものは、窮するも亦た樂しみ、通するも亦た樂しむ、樂しむところは窮通でない、此に道徳あれば、到るところ窮することはない。世の窮通は猶ほ寒暑風雨の往來するが如きものぢや。是故に許由は世に出でざるも穎陽に娛み、共伯は廢せらるゝも、丘首に得意の生涯を送つたと述べた。

榮辱とは何物ぞ、窮通とは何物ぞ、盜跖の富を以て榮と爲すか、基督の貧を以て辱と爲すか、徂徠は用ゐられしが爲めに名を落し、鯀翁は用ゐられざりしが爲めに海内の文章を一身に負ひたり。孔子をして其位を得せ

しめなば、豈干戰に其名を貽さんや。窮通は一時を以て斷すべからず、榮辱は道徳の有無を以て定むべきのみ況んや君子は入るとして自得せざるなく、窮通は四季の風物に過ぎざるをや。吾れ此文を讀過し來て、試みに世上を一瞥すれば、滔々たる今日の政治家、教育家、宗教家、多くは皆窮通榮辱の巷に勞し、其局、天寒と共に凋落するもの、所在皆是ならざるはなし。患に遭ふて屈せず、道を抱て樂しみ、琴を鼓して歌ひ、干を執て舞ふもの今やそれ幾んどぞ。

子遊と子綦 (寓言)

顔成子遊謂東郭子綦曰。自吾聞子之言。一年而野。二年而從。三年而通。四年而物。五年而來。六年而鬼入。七年而天成。八年而不知死。不知生。九年而大妙。

一日、顔成子遊が東郭子綦に謂ふに、予れ君の修養談に従て段々修養したところが、一年たつと野になつた、二年たつと從になつた、三年たつと通になつた、四年たつと物になつた、而して五年目には來、六年目には鬼入、七年目には天成、八年目には不知死不知生、九年目には大妙に達したと申しました。

野とは如何云ふ意味ですか、疎野の野、野蠻の野で、ナト荒つばい方です、從來の註には質朴とあるが、其れよりは荒つばいと見る方が面白い。如何にも始めて道を聴くときは、大底皆野になるもので、善く云へば精神

家、悪く云へば生意氣者ぢや、イヤ天下に碌な者は一匹も居らぬ。修養と云ふことを知らないから、伊藤は腰抜け、大隈は法螺吹き、井上は慾張り、山縣は無學、桂は相場師、嗟呼人物は居らないものだ、宇内を睥睨して、ブルタークの傳を読み、六韜三略を繰返し、孔孟の書に肩を怒らし、莊老の道に神魂を跳らせ、傍若無人氣満々たるもの、先づこれが野でありませう。劍術で云ふならば少しく學べば無暗に鼻意氣が荒つくなり、苟且にも喧嘩が好きになり、口を尖らし、臂を張りて歩むと云ふ、至極初歩の状態で、之れが即ちやつと一年目の處ぢや。然しこれ亦た順序であるから、始めから之を無暗に叱りつけたり、笑つたりしてはいかぬ。之を無暗に叱りつけたり、笑つたりして居ると、其氣が縮んで仕舞つて生長せぬ。故に其れは左様して置いてよい。段々修養してゆく中には、自然と直るから。馬でも左様で駿馬は始めから容易に御せられるものでない。前途生長の望みあるものは、何んでも其の始めは霸氣天を衝く勢のあるものぢや。

次ぎには從である。從は從順の從で、大分おとなしくなつて來たところ、修養が逐々と熟して來た形、本統に修養を志さぬものは、大底野で止て、生意氣で濟んで仕舞ふものぢやが、然し其れより、一段の工夫を凝らす從になる。野で止て居る時には、動もすると、人より馬鹿にせらる、ソラ慷慨家がやつて來た、壯士が來た、修養先生、悟道法師が御出であるなんのと、兎角に周圍より愚弄せらる、傾きがある。开てハアこれではいかぬ、まだく己れは修養が足らぬわいと、如此考へて、肚裏には大慷慨を包んで居ても、外には之を露はさぬ様になり、霸氣天を衝く氣象は蓄へて居ても、平然と人々に交際ふ様になる、此れが即ち從で、第二年目の處である。

次には通、通は融通の通、變通の通である。野であるときには、無暗に荒くなり、從であるときには、無暗

におとなしくなり、兎角一方に偏する様になる。一年目には非常に喧嘩好きであつたが、二年目にはサツパリ喧嘩が嫌ひになり、エ、馬鹿々々しい、こんなものと喧嘩して勝つたところが仕方がない、頑勞ことだ。こんなものや、世の馬鹿ものを相手にして喧嘩する閑暇があれば、軍談席へでも行つて昔の仇討でも聞いて居る方が面白いと、更に敵手に頓着せず、只だ聞き流し、見流しにして、何日もハイハイハイと偏に從を守つて居る。これが即ち第二年月ぢやが、併しこれ斗りでは未だいかぬ。猶ほ一段の工夫を積んで、こゝに通にまで上らなければならぬ。成程喧嘩は馬鹿々々しいに相違ない。然し時としては大に怒らねばならぬ時もある。大喧嘩をやらねばならぬ時もある。其れが所謂通で、言ふべき時、黙すべき時、争ふべき時、争はねべき時、皆各々時があるから、其時に應じて動くのが即ち第三年月の工夫のあるところで、劍術で云へば、無暗に劍を撫して置るのも見ともないが、さればとて人に馬鹿にされて、草鞋の下に踏み躪じられても、泣き寝入りをする日には、更に劍術を學んだ甲斐がないから、可成喧嘩をせぬ様に避けては行くが、いさ鎌倉と相成らば、猛然劍を躍らせて起つと云ふ、この變通體を自得する、之れが即ち第三年月の段落である。

ソコで四年目は物、此の物と云ふ字が仲々面白い。何か一物が腹の底に出來てくるので、野と云ひ、從と云ひ、通と云ふまでは、畢竟相對の義で、人を罵るとか、喧嘩を吹かけるとか、相手にせずして黙して居るとか、時と處に應じて進退するとか、何れも他に對し、外に向ふて掛け引きすることであるが、物と來ると絶對だ。己れは一個の見識と、腹の座り處がドツサリ出來て、所謂『寂然不動』の本体が自然と具つて來る、この處を云ふのである。王陽明は『四十餘年睡夢の中、而今醒眼始めて朦朧』と云ひ、孔子は『四十にして不惑』と述べ、孟子は『予れ四十にして心を動かさず』、『我れ善く吾浩然の氣を養ふ』と説いた。スルトこゝに莊子



が顔成子遊を借りて四年目を物と定めて、修養の順序を教へたのは、誠に實際上の經驗談で、記者も實際其經驗がある。其れは段々にやつて居る間に何となくウンと腹に一物が成果て来て、ドツサリ動かなくなつてくる様に思はれる。年から云へば先づ四十、修養から云へば第四番目の段落である。

次に五年にして來、六年にして鬼入とあるが、之は何れも物より出て來る者と、物に舍り入る者との二ツを指すのであつて、此物と云ふ者が這入つたばかりでない、逐々と此物より精神生氣が勃々と出で來る。又之へ鬼即ち神が入り込みて、之と契交し、之と合體し、天人合一の本體を成就せしむる者、之を鬼入と云ふのである。次には天成、これは野從通の三界を經來つて、確たる一物、即ち不動不惑の神魂を鍛へ造へ、生氣奮勃、鬼神往來の身の上となる時には、敢て無理に野とも従とも通とも、何んとも考へぬのに、自然と『中和』の理に合し、『天地位し萬物育す』とある如く、春は春、夏は夏、秋は秋、冬は冬、四季の消息に従ひて、何事にも凝滯せず、何物にも躊躇せず、スラリ／＼と百事百物を處斷し得て、更に澁苦の跡を見ずと云ふ、最も修養の練れて自然に合し來る處の體を云ふので、横井小楠が『此道未レ聞ニ一躍求ニ、不レ助不レ長自悠々』と云つたり、又は『神知靈覺湧如レ泉、不レ用ニ作爲ニ付ニ自然ニ』と述べたりした處の奧義と同じ事で、一寸一朝には得られぬが、段々修養を積んでゆくと、神知靈覺が自然と泉の如くに湧いて出で、混々盡きざる天成即ち自然體の處を云ふのである。

而して最後は八年目の不知死不知生と九年目の大妙であるが、不知死不知生とは所謂る死生脱却の體で、もうこゝらになつて來ると、死もなく生もなく、只々自然の化に従ふて往來するもので、山岡鐵舟が大に怒つて或る和尚を投げたところが、和尚は庭の彼方へ投げられながら、山岡さん和尚は居ないぞ居ないぞと云つたそう

だが、成るほど此等の坊主になると、最早や形體の中には居ないのだ。和尚の形體を投げたところが、和尚の『本我』を投げることは出來ないから何んにもならぬ。和尚を殺したところが殺したにならぬ。丁度或僧が敵に擒ばれ、將に其首を刎れられんとした時、其の和尚が大口開て呵々と打笑ひ、『珍重す大元三尺の劍、電光影裡に春風を斬る』と吟じて、斷頭臺上に其頸を伸たところが、流石の敵人も非常に感服して、早速其和尚を赦したと云ふことぢやが、基督教で云へば、永生に入るを稱へて、此世の死生の外に出て居る姿ぢや。

又大妙とは最も大切なる奥の奥、玄の玄、極の極、無限の無限、無窮の無窮を云ふもので、本書にある壺子は、確かに此大妙に達して居たもので、つまり説明は出來ないが、大妙と云ふから、言語の外に脱して、出沒自在、變通無碍の眞人に成りあがつた體を云ふのであつて、天を呼べば、天こゝに出で、地を呼べば地こゝに現はれ、馬鹿にもなれば、智者にもなり、勇者にもなれば臆病にもなり、大く撞けば大く鳴り、小く撞けば、小く鳴り、喜怒哀樂愛惡欲各々自然に隨つて放卷彌藏する、天地大の大人物を指すのである。之を修養の極致と爲す。

ソコテ吾々も是非とも遂には此大妙に至らなければならぬ。然し初めより一躍直にこゝに至らんとすれば、必ず拙て苗を長ぜしむる虞あれば、矢張り野より從、從より通と、逐々段階を経て、遂にこゝに達する様に致さればならぬ。眞に修養に志し、屈せず撓まずして行くときには、屹と此順序を經るに相違ない。因て今此の莊子を借りて修養の案内を爲すのであるが、莊子の述べたる千萬言も、畢竟斯の極意を説くのが主眼である。

闕 雞 (逢生篇)

紀涓子、爲王養二闕雞。十日而問。鶏已乎。曰：未也。方虛橋而恃氣。十日又問。曰：未也。猶應二響。景十日又問。曰：未也。猶疾視而盛氣。十日又問。曰：幾矣。望之似木鶏矣。異鶏無二敢應者。一反走矣。

【註一】 王 此の王を司馬彪は齊王と云ふてゐる  
 が列子には周の宣王としてある。

【註二】 虛橋 實なくして自ら矜ること。

【註三】 應二響 景一 他の鶏の聲を聞き姿を見れば直に之に應ずる事。

サア之を御覽なさい。修養の順序を具體的に説いたのである。

紀涓子と云ふは、當時闕鶏を養成する名人であつた。或時王の爲めに其闕鶏を養つて居たところが、十日目に王が什麼ぢや、已に喧嘩させても宜いかと仰せられるから、ごう致しまして、未だ修養の初歩で、方に虚橋にして氣を恃む最中で御座る。と申上げた。虚橋とは空威張りで、氣を恃むとは血氣に任せて相手欲しやと構へて居る風格なり。スルト又た十日経ちて、什麼ぢや、最早や二十日になるが、已にするか、即ち已に宜いかと尋ねらるゝから、まだ不可ませぬ。血氣に任せて、直に喧嘩する様な事は止めましたが、まだ標景に應

じますと申上げた。標とは警で、他の鶏の鳴く聲の事、景とは形で他の鶏の形體である。喧嘩好の態度が改つても、まだ他の鶏の聲を聴いたり、其形體を見れば、直ぐに之に應ぜんとする様であるから、駄目であるとの事なり。スルト又た十日経つて、什麼ぢやな、こんどは三十日にもなる、最早や宜さそうなものぢやと仰せられるから、イヤまだ不可ませぬ。未だ疾視して氣を盛んに致しますと答へた。疾視とは目を釣て物を見ること氣を盛んにすとは、大威張りに威張て居ること、他の鶏の鳴く聲や其體を見て、直ぐに喧嘩腰にはならなくなつたが、まだ妻相に睨んで居る。ソナ事では未だ不可いとの事なり。然るに今度は四回目、即ち四十日目になりて、王が又た什麼ぢやと尋ねられると、左様幾んど宜う御座います。と云つてつれて来たが最早や他の鶏が鳴うが來やうが、一向平氣で丁度木で造つた鶏の様になりました。其故に異鶏が來ても、見たばかりで氣味がわるくなり、敢て喧嘩に應ずるものなく、反て逃げて仕舞ひました。

夫れ修養に四段あり。第一段は、氣概を養ふに在り。螳螂の斧を揮ひ、鶏犬の熊虎に捍る、皆な是れ自家を護するが爲めのみ、敢て之を晒ふべきにあらず、寧ろ其氣骨を稱すべきなり、塗人故なく我れに鐵拳を加ふ、義固より起つて争ふべし、自ら反みて縮からは、千萬人と雖ども吾れ往かん、而して其の利害得喪を顧みざるもの、之を稱して大丈夫と謂ふ。若夫れ鼎鑊に懼れ、威力に屈し、其頭に尿し、其臂に鞭たるも、吾阻遠巡只管其身の安全を圖るもの、之を稱して腰拔と謂ふ。吾人の修養の第一着は、乃ち此の恃氣底の丈夫魂を養ふに在り。而かも是れ初歩のみ。未だ鄙夫劍を撫して起つての譏を免るゝ能はず。

第二段は進取奮闘の勇を養ふに在り。大丈夫世に出づ、よろしく天下を相手取て立つの概あらざるべからず。吾に天下を相手取て立つの概あるのみならず、更に進んで何物をも粉碎し呉れんと欲する勇氣なからざるべからず。

らす。其れ然り然れども常に鋒銜を露し、圭角を示し、如何にも智者らしく、如何にも手腕家らしく、何人にも對抗して、何日にもお相手申さんと構ゆる人の如きは、所謂る鷄景に應ずるもの、未だ與に修養の奥義を語るに足らざるなり。

第三段は自重の精神を養ふに在り。虚橋ならず、鷄景に應せず、滿を持して放たざるもの即ち是れなり。然れども猶ほ未だ其人たるを示すの意なきを免れず。こゝを以て眼容睢々たるものあり。言語察々たるものあり。氣鋒を包蔵すること能はず、疾視盛氣の風毛を顯はし。堂に上るも、室に入らざるの嘆あり。

第四段はいよゝゝ圓熱の境に入りて、圓轉滑脱の妙を得るに在り。  
『そこひなき淵やは騒ぐ溪川の淺き瀬にこそあだ浪は立て』

旌旗動かす、陣營靜かなりとは、蓋し此の第四段の境涯を謂ふなり、變化出沒、圓轉滑脱、臨應自在の活劇は、即ち此の全體の靜中より起り來る。已に變じて木鷄となる、而かも死したる木鷄にあらず、虚橋恃氣、應鷄景、疾視盛氣の三段を経たる百練の將、千磨の兵、一望すれば、寔に悠々閑々たり、而かも一朝變を告ぐれば、龍騰虎嘯、電擊雷轟、風雲舞ひ、天地撼く、予が家嘗て一闘犬を畜ふ、風神群犬に異なり一日牽きて街頭を逍遙す、大犬小狗交々來て之れに吠へ。猶々たり、置々たり、而かも彼れや更に之を關知せざるものゝ如く悠々として大道を濶歩し、平々たり、凡々たり。虚橋ならず、鷄景に應せず。疾視せず、盛氣せず。實に所謂る木鷄の如く其れ然りき。蓋し自ら恃む所あるもの、概ね斯くの如し。吾人豈之を莊子にのみ得ると謂はんや。

季咸と列子 (應帝)

鄭有<sup>二</sup>神巫<sup>一</sup>。曰<sup>レ</sup>季咸<sup>一</sup>。知<sup>レ</sup>人之<sup>レ</sup>死生存亡<sup>一</sup>。禍福壽夭<sup>一</sup>。期<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>歲月旬日<sup>一</sup>。若<sup>レ</sup>神<sup>一</sup>。鄭人<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>。皆棄<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>走<sup>一</sup>。列子<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>。而<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>醉<sup>一</sup>。歸<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>告<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>壺子<sup>一</sup>。曰<sup>レ</sup>始<sup>レ</sup>吾<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>夫子<sup>一</sup>之道<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>至<sup>一</sup>矣。則<sup>レ</sup>又有<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>至<sup>一</sup>焉<sup>一</sup>者<sup>一</sup>矣。壺子<sup>レ</sup>曰<sup>レ</sup>吾<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>汝<sup>一</sup>既<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>文<sup>一</sup>。未<sup>レ</sup>既<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>實<sup>一</sup>。而<sup>レ</sup>固<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>道<sup>一</sup>與<sup>一</sup>。嘗<sup>レ</sup>試<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>來<sup>一</sup>。以<sup>レ</sup>予<sup>レ</sup>示<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>。明日<sup>レ</sup>列子<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>見<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>壺子<sup>一</sup>。出<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>謂<sup>レ</sup>列子<sup>一</sup>曰<sup>レ</sup>噫<sup>一</sup>。子<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>先生<sup>一</sup>死矣。弗<sup>レ</sup>活<sup>一</sup>矣。不<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>旬<sup>一</sup>數<sup>一</sup>矣。吾<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>怪<sup>一</sup>焉。見<sup>レ</sup>濕<sup>一</sup>灰<sup>一</sup>焉。列子<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>。泣<sup>レ</sup>涕<sup>一</sup>沾<sup>レ</sup>襟<sup>一</sup>。以<sup>レ</sup>告<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>壺子<sup>一</sup>。壺子<sup>レ</sup>曰<sup>レ</sup>向<sup>レ</sup>吾<sup>レ</sup>示<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>地文<sup>一</sup>。崩<sup>一</sup>乎<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>震<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>正<sup>一</sup>。是<sup>レ</sup>殆<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>吾<sup>一</sup>杜<sup>レ</sup>德<sup>一</sup>機<sup>一</sup>也。嘗<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>來<sup>一</sup>。明日<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>見<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>壺子<sup>一</sup>。出<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>謂<sup>レ</sup>列子<sup>一</sup>曰<sup>レ</sup>幸<sup>一</sup>矣。子<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>先生<sup>一</sup>遇<sup>レ</sup>我<sup>一</sup>也。有<sup>レ</sup>瘳<sup>一</sup>矣。全<sup>レ</sup>然<sup>一</sup>有<sup>レ</sup>生<sup>一</sup>矣。吾<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>杜<sup>レ</sup>權<sup>一</sup>矣。列子<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>告<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>壺子<sup>一</sup>。壺子<sup>レ</sup>曰<sup>レ</sup>鄉<sup>レ</sup>吾<sup>レ</sup>示<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>天壤<sup>一</sup>。名<sup>一</sup>實<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>入<sup>一</sup>。而<sup>レ</sup>機<sup>レ</sup>發<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>踵<sup>一</sup>。是<sup>レ</sup>殆<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>吾<sup>一</sup>善<sup>レ</sup>者<sup>一</sup>機<sup>一</sup>也。嘗<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>來<sup>一</sup>。明日<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>見<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>壺子<sup>一</sup>。出<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>謂<sup>レ</sup>列子<sup>一</sup>曰<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>先生<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>齊<sup>一</sup>。

吾無二得而相一焉。試齊且復相之。列子入以告壺子。壺子曰。吾鄉示之以太冲莫勝。是殆見吾衡氣機也。嘗又與來。明日又與之見壺子。立未定。自失而走。壺子曰。追之。列子追之不及。反以報壺子。曰。滅矣。已失矣。吾弗及己。壺子曰。鄉吾示之以未始出吾宗。吾與之虛而委蛇。不知其誰何。因以爲弟靡。因以爲波流。故逃也。然後列子自以爲未始學而歸。三年不出。爲其妻爨食。豕如食人。於事無二與親。雕琢復朴。塊然獨以形立。紛而封哉。一以是終。

- 【註一】 神 巫 事。 巫子の
- 【註二】 壽 夭。 壽は生命長きをいひ、夭は短命なるをいふ。
- 【註三】 不二以句 數一。 十日を出
- 【註四】 濕 灰。 濕りたる灰の如くにして
- 【註五】 地 文。 地は靜文は象、即ち至靜の極。
- 【註六】 德機。 德力の表面に
- 【註七】 杜 權。 權は機と同じ不動の中、中に動く所の力。
- 【註八】 天 壤。 壤は地、地文の機、内に發して外に露れしもの。
- 【註九】 名實不レ入。 至靜にして、名象の指すべきなきをいふ、名なく物なき事。
- 【註十】 機發二於踵一。 發動の氣下より上つて
- 【註十一】 太冲莫勝。 太冲は太虚の無心なるが如きをいひ、莫勝は機捉すべからざる有様をいふ。
- 【註十二】 衡氣機。 衡は平かなり、又半なりで其の
- 【註十三】 吾宗。 宗は本來の性。
- 【註十四】 虛而委蛇。 虚は虚無、委蛇は物に隨つて變する事。
- 【註十五】 爲二弟靡一。 困伏の
- 【註十六】 爲二波流一。 不正の
- 【註十七】 塊然。 無情の
- 【註十八】 紛而封。 紛々たる世態に對して守る所ある意味。

さて茲に壺子と云ふ大先生がムりました。列子と云ふ弟子が之を崇拜して、天下此人より豪い人は外にあるまいと考へて居ると、又茲に一人季咸と曰ふ不思議な豪物が顯はれた。此季咸は「人の死生存亡禍福壽夭を知り、期するに歲月旬日を以てするに神の若し」とあるから、何んでも誰某は何日死ぬ何日禍にかゝり何日福に會ふ、なんと云ふことをチャンと能く指示たものと見える。スルト列子は直に欽慕む質と見えて、これは大變だ壺子などの及ぶところではない。己れ一番師匠換をして、季咸に従ひ、此不思議な術を授かりたいと考へ、遠慮なく壺子の前に來りて『さて先生大變な豪い人が出て來ました。此人は一寸と人の容貌を觀ると、直ぐに何日死ぬ、何日まで生きる、と云ふことを指示る、私は殆ど感服致しました。實に此れまで先生を天下一人と思ふて居りました、却々先生よりズツ、至れるものと思ひます』と、申し出づると、壺子は驚いた様子で、『左様か其れはく豪い者が出来たものぢや、私も餘程の齡になつて、何日死ぬやら分らぬものぢやが、一つ其先生に見てもらひたいものぢやのう』と云ふから、宜しう御座ります。左様なれば早速談して見ませうと答へて、直に季咸に其談しを致すと、季咸も心得へ『何に壺子大先生が左様か、其れなら御面會を致そう』と、

快よく引き受けて呉れたから、ソコテ列子が立合ひで、兩人が面會することになった。於此乎、一日兩人相會して互ひに様々談話を致して、さて別れましたが、列子は心配でならぬから、直ぐに蹊を遂ひかけて季咸に會ひ、『時に我壺子先生は如何でせう、まだ永壽をされませうかな』と尋ねると、季咸は大息して『其處ですて、誠に早やお氣の毒ですが、餘程壽命が通りました、モ一十日と持ちますまい』と申すから、元來輕躁の列子は吃驚して、これは大變、早く先生に知らせにやならないと、飛んで来て、壺子に其事を談すと、壺子は又た驚いたる様子にて『其れはく困つた事に相成つた。本當に季咸が左様申したか』と申しましたとも、而して彼れが申した事に、未だ曾て外たことは御座りませぬ。これは悲慘事になつて來た』と泣涕沾襟、潸然泣き出すから、壺子は之を慰めて、『然し壽命ぢや仕方がないが、何と尙一遍伴れては來てくれまいか、こんどは確かり見てもらひたいものぢや』と、申すにより、更に季咸を壺子の家に誘ふた。スルト又々以前の如くに、互ひに談をして歸りましたから、こんどは何だか、矢張り間違はあるまいなと思ひながら、列子が又た遂に尋ねると、季咸は大に誇り面して『喜び候へ、壺子先生は予れに會ふたる徳により、まだこれから生きられます。十日や二十日には死なれませぬ。半年や一年は永壽せられませう』と、大威張りに申しますから、列子も喜んで之を又た壺子に告げますと、壺子が『ア、左様か、其れは奇態ぢやが、尙一遍どうか呼んで來て呉れないか』と云ふから、又々三度目に季咸を壺子に伴れて参りますと、こんどは季咸も何だか頻りと首を傾て考へて居た様でしたが、歸りて後、列子に向ひて、『どうもお前の先生の壺子と云ふ人は奇妙な人である、見る度毎に變つて居る』、『子の先生齊しからず、吾れ得て相する無し』とあるから、餘程困つたものと見え、『どうも私には解らなくなつて仕舞つた』と云ふから、又た之を壺子に談すと、壺子は始めて微笑を含んで『ア、左様か試みに

尙一度伴れて來い』と意味ありそうに申すにより、列子が又た々々季咸を誘はんとすると、季咸は『否だ往かぬ』と云ふ、ソコテ列子が『其れは先生の威信にも關係致させませう、これまで先生が言はれた事に不中たことは一度もなきに、唯り壺子先生に對してのみ不中たと云はれては、名譽にも關することゆゑ、是非に尙一度丈會て、此度は十分に御觀相ありては、如何でありませう』と、例の神經質の性ゆゑ、熱誠的に勧めますと、『然らば尙一度丈會ふて見やう』と云ふことになり、いよく第四度目の會見となりました。然しこんどはチョツト季咸が壺子に會ふや、否や、『自失』して逃げ出しました。スルト壺子は高音聲を揚て『ソラ季咸を亡すな、大山師を亡がすなよ、追つかけて捉捕へよ』と直に列子等に下知を傳へましたが、最早や季咸の影は見えなくなつて仕舞ひました。

諸君は此意味が解りましたか、解りますまい。列子もサツパリ其意味が解りませんでした。ソコテ畏る々々壺子の前に出で、『先生誠に恐れ入りました。尊師より季咸が豪いと思ひまして、一時先生を離れんと致しましたは、重々の過り、又其れにつけても、如何理で、季咸が先生に閉口致しましたが、其邊の處を御教訓に預からば、有難存じます』と恭しく拜伏致しますと、壺子は阿々と打笑ひて、『ア、左様か、然らば教へ遣はさん。初日には予れ彼れに示すに、『地文を』以てした、『地文』は『死灰枯木』の體じや、故に予れを直ぐに死ぬると思ふたのだ。翌日には予れ彼れに、『天壤』を示した、春陽來復の姿ぢや。故に予れを生き復へるべしと云ふたのだ。三日目には予れ彼れに、『太冲莫勝』を示した。之れは『不死非生屈伸往來』の道ぢや。故に殆んど解らなくなつた。而して終結には『弟靡』、『波流』の極意を示したるより、彼れは目を舞はして逃げて仕舞つたのだ。お前の様に、直慕する虚徒作野郎の神經質では、兎ても道に至れるものでない、まだく修養せれば

不可ぞ」と、大のお目玉を頂戴いたしました。於此乎、列子は是より大奮發心を起しまして、遂に其後は一生命、三年の修養を積み、「形骸復村、塊然獨以形立、紛而封哉、一以是終」とあるから、輪達自在、薄博淵泉、時に之を出す底の眞人となり、いよ／＼莊子に先だち斯道の開祖となつたので御座ります。さて諸君は前々よりの解釋により、莊子の教義が解るにつけても、此の大奥義、此大極意、即ち此修養の成就したる『圓滿無量』の本體が、大抵お解りになつたてで有りませう。顧みれば今時人物評が流行だが、小人俗輩は直に分るが、大人や眞人と來ると、其様に直ぐ分るものではない。英雄は英雄に知らるで、警者の象評、イヤハヤ傍腹痛い事でゐる。カラ／＼口で笑て心で泣て居る人もある。委容謹直に見えて肚裏大横着者もある。内に烈火を包んで、形、死灰に似た人もある、悲憤慷慨に見えて、薄志弱行の人もある。一寸分る者でない。よく諧謔を吐けば即ち面白き人なりと之を評し、怒髮冠を衝て憤れば、忽ちイヤ／＼畏るしき人なりと之を斷じ、時と處と位に従ふて其人を評す。是れ凡俗の爲す處、然し修養の積んだ人は眞人と稱へて、調度此壺子の様に、何んでも森羅萬象が、其意に應じて、何日でも其腹の中より出づるのである。即ち平生其腹の中に這入つて居るのである。横井小楠が『雨雪風雷、自然に發す』と吟じたのも、亦た此の意味で、超然世外に嘯いて居る事もあれば、憤然人道を叫んで出て來ることもある。英雄かと思へば神仙、神仙かと思へば英雄、時と處と位に應じて『圓滿無量』の心魂を振り起し來るものであつて、兎ても常人に解るものでない。然れば此『圓滿無量』の修養を積むには、如何にしてよろしきや、如何なる順序に懸らねばならぬかと云ふお尋ねも出ませうが、其れば前上木鷄の篇や、九年目大妙に達するところなぞを研究せらるべし。

士成綺と老子 (天道)

士成綺、見老子而問曰。吾聞夫子聖人也。吾固不辭遠道而來願見。百舍重趂而不二敢息。今吾觀子非二聖人也。鼠壤有餘蔬。而棄妹不仁也。生熟不盡於前。而積歛無崖。老子漠然不應。士成綺明日復見曰。昔者吾有刺於子。今吾心正卻矣。何故也。老子曰。夫巧知神聖之人。吾自以爲脫焉。昔者子呼我牛也。而謂之牛。呼我馬也。而謂之馬。士成綺雁行避影。履行遂進。而問修身若何。老子曰。而容崖然。而目衝然。而顴頰然。而口闕然。而狀義然。似繫馬而止也。動而持。發也機。察而審。知巧而觀於泰。凡以爲不信。邊竟有人焉。其名爲竊。

【註一】 百舍重趂 舍は三十里、百舍は三千里をいふ、趂は足跟の厚皮、即ちかかとに厚皮を重ねるを云ふ。

【註二】 鼠壤有餘蔬 鼠穴の中にも

ことにて、食物など  
のあり餘る意。

【註三】 雁行避影 身をそばだて、後へ下る  
ことにて尊敬した貌。

【註四】 履行 一歩々々に足  
を運ぶこと。

土成綺と云へる人あり、老子に見へて、さて先生にお尋ね申たい。私は先生を聖人であると聞き、わざ／＼御目にかゝらんと志し、遠路をも辞せず、百日も旅して更に息まず、足の底を厚くするまでして参りましたが、さて来りて聞けば先生は聖人でないそうで、倉庫に食物を蓄へて居ても、妹にも遣らず、作物が盡きざるほどあつても怒張ること崖りなしと承る。ソコで来たことは来たが、大失望で御座ると云へば「老子漠然不應」とあるから、平氣な顔して之れに應へなかつた。

さて翌日になりて、土成綺は考へ直した。これは予輩が悪かつた、人の評判を聞て、直ぐに之を信じ、其實否如何をも質さずして、老子を置つたのは早計であつた。又た老子が、あれほど置られて居ながら、平氣な顔して亂れなかつたと云ふのも、矢張り老子が聖人で、人の悪評が嘘かも知れないと。ソコで翌日復び老子に見へて、さて昨日は先生を刺りましたが、今日落着て考ふれば、誠に失禮を仕りましたと云ふと、此時老子は答へて、

『人れ巧知神聖の人、吾自ら以爲く脱す』

と謂つた。而して此れが本文の骨子である。巧は巧者、知は知慧、神は神佛の神、聖は聖人の聖である。一體巧く事を爲やうとか、知慧を振はふとか、イヤあの人には神佛の様であるとか、聖賢の徒であるとか、色々評判を取らうとするから偽善に陥る。凡そ眞人たるものは、世人の評判や、人の褒貶に頓着するものでない。牛と謂へば牛でよろしい。馬と謂へば馬でよろしい。人の謂ふことは、何様でもよろしい。要は自ら反りみて疚し

からざるに在る。吝嗇と云はれ様か、不仁と云はれ様か、一向人言には頓着せぬ。之れが老子の本領である。ソコで土成綺が低頭平身、這ふ様になつて前に進み、恭しく修身の要を問ふと、『兎に角お前の顔構が不可ない。お前の容は、崖然と力み返えりて、直ぐに喧嘩でも仕掛けそうぢや、お前の目は衝然と釣り上り、お前の顔は頽然と面積を廣げ、お前の口は闕然と直ぐに理窟を謂ひそうぢや。而してお前の體は、義然と豪相に構へて居るが、丁度木に繋いである馬の様ぢや、釋けば直に奔らんとして居る。かの機敏で、審察で、利巧で、而して横柄な連中は、皆無實者ぢや。御覽よ、籬の外より人の家を覗て居るものは竊盜であるよ』と、大喝を喰はされたのである。

滔々たる今日の人士、多くは皆、盜竊の類のみ、曰く巧、曰く知、曰く機、曰く敏、曰く察、曰く審、而して其風貌や喬にして傲なり。かれ南洲が大村を推し、一翁が海舟を擧げ、白隠が濡衣に甘んじ、太閤が園基に破れて、哄笑したるが如き態度は、今やそれ何處に在る。

牛と謂はるれば、牛なるも猶ほ怒り、馬と謂はるれば馬なるも猶ほ憤る、況んや自ら許して學者と稱し、自ら氣取て政治家と謂ひ、我が言を聞け、我が手腕を見よと呼號するものをや。崖然人に接し、義然世に臨み、一毀一譽に榮辱を分ち、終生邊竟を窺ふて休戚す。噫、吾人は知る、終に大物の跡を我國に絶つに至らんことを。嘆すべき哉。

陽子と老子 (寓言)

陽子居南之沛。老聃西遊於秦。邀於郊。至於梁而遇老子。老子中道仰天而嘆曰。始以汝為可教。今不可也。陽子居不答。至舍。進盥漱巾櫛。脫屣戶外。膝行而前曰。向者弟子欲請夫子。夫子行不問。是以不敢。今聞矣。請問其故。老子曰。而睢睢盱盱。而誰與居。太白若辱。盛德若不足。陽子居蹙然變容曰。敬聞命矣。其往也。舍者迎將。其家公執席。妻執巾櫛。舍者避席。煬者避竈。其反也。舍者與之爭席矣。

【註一】盥漱 手を洗ひ口を漱ぐ器。

【註二】巾櫛 手拭と櫛。

【註三】蹙然 驚懼の態。

【註四】家公 旅館の主人。

陽子居と云ふ紳士があつたが、一度老子に會ふて、道を聴きたいと思つて居たが、丁度遊歴中の途中で老子に會ふこととなつた。ソコテ老子を迎へ、得々然として宿泊處まで隨行して歩いて居ると、老子が不斗背後を顧

みて、一寸と陽子の顔を眺めました。ア、不可不可、予れ始め汝を以て教ゆべしとせしが今は不可なり」と。斯く一言を發したまふ又たく「ス々」と往て仕舞ひました。陽子は其時これとは思ひましたが、何分老人に似合はぬ疾足で、ドン／＼行て停まりませぬから、仕方なしに隨て参り、やがて宿泊處へ着きました。から先づ郷寧に老子を待遇し、機を見合せて後、膝行しながら老子の前に出て「さて先生、弟子向者に夫子に請はんと欲す。而かも夫子や行て問あらず、是を以て敢てせず、今問あり、請ふ其故を問ふ」と、其何故に「始め教ゆべしとなし、而して今は則ち不可」で御座りますか、私も折角遙々先生を尋ねて参り、其道を聴かんと欲して樂んで居りましたに、今更教ゆべからずとは、誠に無情心外千萬に存じます。どうぞ左様仰せられず此の上ながら御教導に預りたい」と赤心を吐露して述べますと、老子は「ア、左様か、然らば鏡を持って参れ。陽」へー鏡を持って如何致します。老」汝の顔を見る。陽」顔が何か致しましたか。老」イヤサ先刻汝の顔を見たが、汝は予に會ふて眞人となる修養を積まふと云ふのであるが、先づ其顔を直されば、兎ても品物にはなれぬわい、一而は睢々盱々たり」左様に何時も目を釣て睨み反りて居る様では、到底駄目だ。爾は誰と與に居らんとするや未だ和光同塵の工夫を心得ぬものぢや。夫れ太白は辱。たる如く、盛徳は足らざるが如しだ、」どうぞや解つたか」とありました。諸君には此の意味が解りましたか、必ず解りましたでせう。陽子にも此意味が解りました。ソコテ陽子は此時「蹙然として容を變じ、敬んで命を聞けり」とありますから、ハア、さては此處なんめりと始めて大妙の悟徹を得て、さて其れより自宅へ歸つて来たが、其始めて家を出て旅したときには「家公は席を執り、妻は巾櫛を執り、舍者は席を避け、煬者は竈を避けたり」とあるから、何んでも皆々陽子の前にはヘコヘコ頭を下げて敬禮したのであつたが「其歸る時は舍者之と席を争へり」とあるから、歸る時は一向皆々敬禮



もせず。却て遠慮なく、坐席を争ふた位な心安き人物となつて居たと云ふことで御座ります。

さて諸君『君子重からざれば則ち威あらず』とありますからそう輕卒に喋舌したり辯問見た様に、チヨコ／＼跳ね廻りては、一向價値のないものですが、さればとて何時も苦蟲を食い潰した様な顔をして重威相に見せかけて居たところが、其れで價値の上がるものではない。却て其程の人物でもなきに、態と切口上で、チツ一に氣取つて居るものほご可笑しなものはない。或人の知人に、一人有名な先生があつたが、此人急に民間より一躍何位何官と云ふのになりましたが、或時前面より二人曳で、高帽で、燕尾服で、灰殻で、空を斜に睥みながら、揚々としてやつて来た、或人も一寸久振りではあるし、先づお目出度の挨拶でも仕様と存じて、『誰某君お久し振り』と、何に思はずいつもの通り心安く聲をかけますと、先方でもいつもの通り『オーこれは／＼某誰君』と出掛けると思ひしに、左はなくして、いとも嚴重に、漆柿を食つた様な面貌をして、急に鹿爪らしく出掛けたから、餘りの可笑しさに吹出しそうになつたと、或人の話しであつたが、左様なつてくると重々しいどころか、却て滑稽になつて仕舞ふ。又或時或人が或教育家のお役人を尋ねました。此人は至極面白き人で、却々平明の人であつたが、不斗した關係より急に用ひられて大得意になつて居つた矢前の事で、其或人が其門を通りましたことゆゑ、一寸訪問したところが、暫く支關に待たせて置いて、『只今は御用で出掛つて居るから又た来てくれ』との取次ぎさ。尤も平生が平生なら、何とも思はなかつたのだが、以前なら、自身が支關に出て来て、『ヤー上床り玉へ』位はやる先生が、急に大得意で御用風を吹かしたとは、随分滑稽な談ではないか。

先づザツト左様なもので、老子の陽子に教へたところは此處ぢや、いつも重威相に構て居て、それで尊敬さ

れるやうでは『練熟』の體ではない。至極親しく交つて居て、それで輕蔑されぬのみか、却て人々より畏敬を受ける云ふ、この本體が、本眞ものである。然し此本體は製造して出来上るものでない。實力身に備はり、學道功を積んで、始めて自然に出来上るものだから、乃ち修養談が要る様な譯で、つまり平生の心得が肝要です。老子が陽子に向ひて、『爾は誰と與に居らんや』と、一喝を喰はせたのも矢張り此處で、いつも力み返りて鹿爪らしく構へて居たところが、はじまらぬもので、世に樂しみも面白みもあるものでない。又それが人情でもない『誰と與に居らんや』誰とも與に居らぬ。如此人は廣き世界に己れ一人ぼしだ、御前様とか、閣下とかは云はれても居やうが、其代り陰では僕婢等が、首指を出し合ひて『親玉は居るか留守か』なんのとやつて居る。之れでは榮華を極めても、所謂虛榮の榮華であつて、眞正神魂の榮華と云ふものでない。阿諛諂佞の徒に愚弄せらるゝ斗りの榮華で、其れで上流と力みて居るのは、丸で狐に騙されて糞桶で行水をして好い心持だと思つて居る先生と同じ事だ。ソコに行くに米國十九世紀の偉人アブラハム、リンコルンは偉物だ。あの人の一生『正直アブ』と呼ばれ、子供にでも女にでも貴族にも平民にも、いつも朋友の如くに交つて居て、そして大英雄、大見識を具へて居たから、眞底から尊敬もせられ、愛せられもした。つまり天眞爛漫の體、此れが本文教訓のある處である。

文惠君と庖丁解牛 (養生)

庖丁爲文惠君解牛。手之所觸。肩之所倚。足之所履。膝之所踣。

羞然嚮然。奏刀騞然。莫不中音。合於桑林之舞。乃中經首之會。文惠君曰。請善哉。技蓋至此乎。庖丁釋刀對曰。臣之所好者道也。進乎技矣。始臣之解牛之時。所見無非牛者。三年之後。未嘗見全牛也。方今之時。臣以神遇。而不以目視。官知止而神欲行。依乎天理。批大郤。導大窾。因其固然。今臣之刀十九年矣。所解數千牛矣。而刀刃若新。發於硎。彼節者有間。而刀刃者無厚。以無厚入有間。恢恢乎其於遊刃。必有餘地矣。

- 【註一】 文惠君 梁の惠
- 【註二】 羞然 皮と骨と離るる音。
- 【註三】 騞然 響は響に通じて物に響である。
- 【註四】 騞然 牛を解く時の聲。
- 【註五】 莫不中音 音樂の呂律に應ずる意。
- 【註六】 桑林之舞 湯の樂
- 【註七】 經首之會 黃帝の作りし咸池の樂章で會は節奏。
- 【註八】 請 感じて嘆ずる聲。
- 【註九】 官 手足耳目等の五官。
- 【註十】 大郤 郤は隙にして骨と肉との隙間を云ふ。
- 【註十一】 導 大窾 骨節の間、自ら大空の缺處あるをいふ。
- 【註十二】 硎 砥石
- 【註十三】 恢恢乎 寛大なる貌。

庖丁は牛を解く名人であつた。一たび刀を把りて牛に向へば、手の觸る、ところ、肩の倚るところ、足の履むところ、膝の行くところ、騞然嚮然と解け來り、刀は音樂を奏するが如く、其容は舞を舞ふに似たりで、如何にも見事のものであつた。ソコで文惠君が之を見て、請立派なものぢや。技もこゝに至るかと思はれ、只今はと、庖丁は餘り喜ばずして答へて曰ふには、私のは技術で御座らぬ。元は技術より進んだものだが、只今は道を好むものとなつて居ります。最初私の牛を解くときは、全牛が眼中に横はつて居りましたが、三年立つと最早全牛が見えなくなつた。而して今日になると神を以て遇ひ、目を以て視ませぬ。而かも五官悉く神に従ふて行止し、郤を批き窾を導き、肯綮を經し、大軀を理す、只だ天理の固然に従ふのみ。他の者は、歳々若くは月々に刀を更へるが、臣は十有九年來、一刀を用ひて解くこと數千牛なるも、未だ之を更へたることなく、刀刃は常に研ぎ立ての如くなつて居る。即ち骨筋には間ありて、此刀刃には厚きことなし、此厚きことなき刀刃を振ふて、間ある筋骨を解くのであるから、恢恢乎として刃を遊ばしむるに餘地ありて、譯の無いもので御座ります。尤も一寸と難しきところあれば、悚然として警戒し、形を正ふして之を視、未だ曾て輕舉せず、ソロソロと微かに刀を動かし來り、已に解くれば刀を提げて起ち、回顧躊躇の後、刀を善くして之れを藏むと申上げた。

ソコで惠君は感嘆して、吾れ庖丁の言を聞いて、養生を得たりと曰はれた。顧みれば凡そ修身齊家治國平天下の要は、皆此庖丁の言に據らざるはないので、倒行逆施は、終を全ふする道にあらず。那翁は時勢の固然に従ふて起れり、是故に能く快刀亂麻を斷ちて進めり。然れども其終に倒れたるは何故ぞ、世は亂を厭ひ、人は靜を欲するの時、尙ほ其刀刃を藏めざりしが爲めのみ。漢皇の天下を有ち、家康の其終を全ふしたる、皆其自

然に從ひしが故のみ。一寸の蟲にも五分の魂ありとかや。鄙夫も其志を奪ふべからず、無理に之を斷せば抗せずんば止まざるべし。威を以て臨み、力を以て壓す、時に或は可ならずとせず、而かも是れ變に處するの道のみ、天理人情の自然にあらず、刀を更へ、人を更へて、尙ほ其解けざるを患ふるは、庖丁に學ぶところなればなり。一家の主となり、一校の長となり、一省に蒞み、天下に對するも、皆此庖丁の極意あるのみ。豈唯だ養生のみと謂はんや。

梓慶と魯侯 (達生)

梓慶削木爲鐻。鐻成。見者驚猶鬼神。魯侯見而問焉。曰。子何術以爲焉。對曰。臣工人。何術之有。雖然有一焉。臣將爲鐻。未嘗敢以耗氣也。必齋以靜心。齋三日。而不敢懷二慶。賞爵祿。齋五日。不敢懷二非譽。巧拙。齋七日。輒然忘三吾。有四枝形體也。當是時也。無公朝。其巧專而外滑消。然後入山林。觀天性。形軀至矣。然後成。見鐻然後加手焉。不然則已。則以天合天。器之所以疑神者。其是與。

【註一】 輒 然 超然と

【註二】 外滑消 外物の我心を亂すべきもの總て消失する意。

梓慶と申す彫刻者が木を削りて鐻を爲つた。鐻とは鐘鼓の懸所にして、兩端各々刻鏤ありとあるから何んでも鐘鼓に關係する美術品でございませう。ところが其鐻の彫刻物が出来て見ると、龍であつたか虎であつたか分らぬが、何んでも非常に善く出来て、生動活躍、まるで自然のもの同様で、人の作工とは思はれなかつた。そこで魯侯が梓慶をお召に相成り、梓慶汝は何んの術を以て、かゝる絶品を爲ることを得るやと、お尋ねに相成ると、左ればにて候、臣は匠工の事で、却々術など申様な事は心得ませぬ。然しながら強てお尋ねとあれば、一つ申上げることが出来ます。臣鐻を爲らんと致しまする前には、先づ氣を耗さず、齋して心を靜かに致します。次には更に齋すること三日にして此作品に依りて爵祿を頂戴したいとか申す様なケチな量見を懐かぬ様に致します。又其次には巧く造りたいとか譽められたいとか申す様な虚榮心を懐かぬ様に致します。而して遂には此目で見て、此手で造るとか申す様な物質界の事を全く忘れて仕舞ひ、其後山林に入りて適材を見立て直に彫刻に取り掛る様に致しまするまで一言にて申せば、我が天然自然の心を以て宇宙に溢る、天然自然の心に合すまでも申しませうか、此外には何んの術も御座いませぬと申上げた。

吁、論理何物ぞ、科學何物ぞ、藝術何物ぞ、コンパスを轉じて尺度を争ふは抑々末のみ、客氣我を騙り、名利我を動かし、我腕を見よ、我技を觀よと高嘯し、公朝に依し、俗界に傲り、我輩々と誇稱するもの、彼れ果して何物をか能くせん。人格已に卑なり、技俗ならざるを得んや。説教然り、演説然り、文章然り、技術固より然り、爲政亦た然り、否、人間百般の眞事業皆悉く然らざるを得ず、世の學理を講じて得々たるもの、技

能を説いて揚々たるもの果して能く、以て天合て天の神祕を解し得るや否や、畢に此一工人に及ばずとせば、笑ふべき也、嘆すべき也。

桓公と輪扁 (天道)

桓公讀書於堂上。輪扁劉輪於堂下。釋椎鑿而上。問桓公曰。敢問公之所讀爲何言邪。公曰。聖人言也。曰。聖人在乎。公曰。已死矣。曰。然則君之所讀者。古人糟魄已夫。桓公曰。寡人讀書。輪人安得議乎。有說則可。無說則死。輪扁曰。臣也以臣之事觀之。劉輪徐則甘而不固。疾則苦而不入。不徐不疾。得之於手而應於心。口不能言。有數存焉於其間。臣不能以喻臣之子。是以年七十而老劉輪。古之人與。其不可傳死矣。然則君之所讀者。古人之糟魄已夫。

【註一】桓公 齊の桓公、名は小白。 【註二】輪扁 車輪を劉る人、名は扁。 【註三】古人之糟魄 魄は粕と同じ、古人の粕といふ如きもの意。 【註四】有數 道家の所謂箇中の説即ち程加減といふ意。

桓公は學問御自慢である。堂上に坐して期々ト聲高らかに御讀書で御座ります。然うすると堂下に、扁と稱して車輪を作つて居る一工人が御座りましたが、忽ち其手に持てる椎や鑿を擲り釋て、ツカ／＼と堂上に上り來り、桓公に問答を仕掛けた。『曰く敢て問ふ公の讀むところは、何んの言たるや。曰く聖人の言なり。曰く聖人在るか。曰く己に死せり。曰く然らば則ち君の讀むところのものは、古人の糟魄のみ』と。何んと面白き問答ではないか、即ち豪相に書物を讀んで得意で居らるゝが、眞に聖人の心を了解しては居られない。否、縱令ひ其心を了解するまでに至つたとするも、之れを其身に自得するまでには却々容易に行かれるものではない。故につまるところは、聖人の遺したる糟魄即ち味の抜けた糟や、生命の去つた死骸を讀んで居るに過ぎない。故に驚倒したのである。左れば桓公は大に怒つて、ごうも失敬な奴かな。大工の身分として、此方が書物を讀んで居るのを、彼れ此れ議論するとは何事ぞ、尤も申譯が立てば、赦して遣はすが、左もなくば死罪である。と睨め附けられた。然しながら此輪扁は、固より尋常一様の大工ではなく、聖人市に隱るの類で、大に桓公に教ゆるさころあらんとしたのであるから、『然らば申上げます、臣の職業でも左様で御座ります。此の輪を斷るにも其呼吸が六ヶ敷いので、徐ければ固からず、疾ければ入らず、徐からず、疾からず、調度宜い按配にキチンと巧く拵め込むと云ふところが、却々口で言ふことの出来ない加減のあるところで、唯一の極意は之を手に得て心に應ずるのみで、數あつて其間に存するに相違ないが、到底口や筆で傳へることの出来ないもので御座ります。ソコで臣は此呼吸を臣の子に喻さんと欲すれども喻す能はず、臣の子も亦た之を臣より受くる能はず、今や臣七十の年になりますも、天下君公の輪を斷り得るもの一人も之れなきにより、いつまでも斯く呼び出されて、椎鑿を弄する所以で御座ります。因つて惟ふに古人も同じく其自得の極意を傳ふことが出来

ないで死んだでせう。乃ち今や君公のお讀みなさる書も味の扱けた生命の去つた糟魄で、幾等大聲を揚げて讀んだところが、其れで聖人になられるものではない。乃ち別に自得の工夫を凝らさればなりません。是れ輪扁が桓公に與へたる大訓告である。

嗟呼、論語讀の論語知らず、主よ主よと言ふもの、必ずしも天國に入るものに非ずと知らずや。曰く寂然不動曰く扱本塞源曰く三道、曰く四練、畢竟是れ何物ぞ。口之れを誦し、舌之れを解く、而かも、己れ之れを自得するにあらず、東郭芋を吹き、猶太席に列す、滔々たる世上の夫子、多くは皆猿鶴の徒のみ、風雨天地を巻き、雷霆頭上に轟き、古今未曾有の大洪水今や我が帝都の大半を浸して、十萬の同胞其間に叫喚す而かも堂上に坐して糟魄を舐めるものは即ち曰く、「何分調査の上で、一先づ報告を待つて」と、或は曰く法例に之れなし、所任其處を異にすと、而して畢に聖明なる陛下の赤子をして、空しく餓學を鞏固の下に漂はしむ。是れ亦た死せる文字に拘泥して、活ける聖學を自解せざる罪にあらずや。顧みれば今日の學者多くは皆桓公の徒のみ、期々聲高らかに諸學を講唱し、多く聞き博く識り、自ら以て學者と爲す。而かも一旦天地の異變に遭遇し、人事の動亂に襲はるゝときは、膽肝忽ち落ち、意氣遽に碎け、手足覺んで爲すところを知らず茫然自失して、平生の高言に應ずる能はざるものゝ所在皆是れならんとす。彼れ聖人の言を讀むものすら、猶ほ且つ糟魄を舐むるものと稱せらる。況んや是れ聖人の言を讀まず、徒らに専門記師の學に従事するものや、其人生の活劇舞臺に落第すべきは、物の數のみ。

孫休と扁子 (達生)

有孫休者。踵門而詫子扁慶子曰。休居鄉不見謂不修。臨難不見謂不勇。然而田原不遇歲。事君不遇世。賓於鄉里。遂於州部。則胡罪乎天哉。休惡遇此。命也。扁子曰。子獨不聞至人之自行邪。忘其肝膽。遺其耳目。茫然彷徨乎塵垢之外。逍遙乎無事之業。是謂爲而不恃。長而不宰。今汝飾知以驚愚。修身以明汗。昭昭乎若揭日月而行也。汝得全而形軀。具而九竅。無中道夭於聾盲跛蹇。而比於人數。亦幸矣。又何暇乎天之怨哉。子往矣。孫子出。扁子入坐有間。仰天而歎。弟子問曰。先生何爲歎乎。扁子曰。向者休來。吾告之以至人之德。吾恐其驚而遂至於惑也。弟子曰。不然。孫子之所言是邪。先生之所言非邪。非固不能惑是。孫子所言非邪。先生所言非邪。彼固惑而來矣。又奚罪焉。扁子曰。不然。昔者有鳥止於魯郊。魯君說之。爲具太牢。以饗之。奏九韶。以樂之。鳥乃始憂悲眩視。不致飲食。此

之謂以己養一養鳥也。若夫以鳥養一養鳥者。宜棲之深林、浮之江湖、食之以委蛇、則平陸而已矣。今休歎啓寡聞之民也。吾告以至人之德、譬之若下載、以二車馬、樂以中鐘鼓也。彼又惡能無驚乎哉。

【註一】 怪んで問 【註二】 茫然無心の 【註三】 爲而不恃 性に随ひて爲すので恃みて爲すのではない。 【註四】

長而不宰 其長者に任せて自ら之を長するのではない。 【註五】 汗 汗俗の 【註六】 九 窟の九つの穴。 【註七】

跛 蹇ぬざり。 【註八】 委蛇 従容自得せし 【註九】 平陸而已 猶人の平地にある。 【註十】 歎

啓 歎は孔で啓は開くこと、見 【註十一】 颺 小風の事。 【註十二】 鷗 小雀の事。

孫休と言ふものがありました。豫て先生と仰ぐ扁子の許に参りまして、さて先生如何なる次第で御座りませうか、拙者は平生修養を心掛くる御蔭にや「先づ郷里に居ても修まらずとは謂はれず、難に臨んでも勇ならずとは謂はれず」随分人望のある方ですが、どうも兎角に不仕合せで「原に田れば歳に遇はず、君に事ふれば世に遇はず」之れは如何謂ふ譯で御座いませう。何か外に天に對して罪でも犯して居る譯でせうか、實に弱つて居りますと、太息を吐いて談をすると、扁子は之に答へて「子獨りかの至人の自行を開かずや、其の肝膽を忘れ、其の耳目を遺れ、茫乎として塵垢の外に彷徨し、無事の業に逍遙す、是れば爲して恃まず、長じて宰

せずと謂ふ」のぢや。然るに今君の様子を見るに、「徒らに知を飾りて愚を驚かし、身を修めて汗を明かにし、昭和乎として日月を掲げて行く」様ぢやが、其れではサツパリ談論にならぬ。併し夫れでも未だ聾や、盲や、跛蹇にもならず、先づ満足に其の身を保つて居ると謂ふのは、何よりの事ぢや。何んの其様に天を怨んで嘆息することがあらうかい、と申すと孫休は悟つたるが如く、又た悟らざるが如く、何か思案の態で、出て行きました。然うすると扁子は之を見送りに後何だか詰らぬ顔をして坐つて居るから、扁子の弟子が其れへ出て来て「先生、何ぞそんなに詰らぬ顔して被居しやいますか」と尋ねるから、扁子は之に答へて「イヤ實に詰らぬ事を致したのぢや、予れ今孫休に至人の徳を聽せてやつたが、ア未だどうも早かつた。彼れは之を悟らぬのみか、却つて惑に陥るであらうが、應病投薬の加減は仲々六ヶ敷ものぢや。古昔非常に美麗鳥が魯國に顯はれた。然うすると魯君が之を捕へて大に悦びソラ十分御馳走をしてやれ、樂しませてやれと言ふので、太牢を具へ九韶を奏して、之を饗應たところが、鳥は吃驚仰天して、其の御馳走を喰ふどころか、其の音楽を聴くどころか籠園の裡で大騒ぎに騒いで鳴き叫んだと言ふことである。調度之と同じ話で、予が今孫休に至人の達道を聴かせたのは恰もこの鳥に太牢を與へ九韶を奏して聽かせたと同じことであつたらしい。鷗を馬車に乗せ、鐘鼓を鷗に聽かせたところが、駄目である、彼等は驚くまいことか、屹度驚くに相違あるまいと申しましたと云ふのであります。

實に面白き、譬喩ではありませぬか、應病投薬の法は、本當に六ヶ敷もので、修養の初歩のものには、到底至人の徳などの解し得らるべきものではない。生中悟つたつもりになれば、途方もない見當違ひの觀悟を爲し、一向世間に通用せぬ、放言大語の人と爲つて仕舞ふものである。例へば基督教についても同じことで、

其の奥義に至つては『神と俱に歩む』より遂には『神と一になる』迄進まねばならぬのであるが、一躍直ちに  
 此處に至ることは六ヶ敷い。リビングストーンは阿弗利加人の間に答へて『天國は涼しい樹の下で眠つて居る  
 處である』と言ふた。基督も『地獄とは火の燄えぬ毒蟲の盡きの處である』と言はれた。眞逆に文字通りに解  
 釋されては困るけれども、抽象的に言ふて聽かせて分らぬ連中には、之れより外に道ひ様がないのである。彼  
 れ孫休は能く其身を修め能く其の膽を練つて居た。然しトント不遇で面白くないから、扁子に處世の覺悟を聽  
 きに行つたのであつた。然るに扁子は既に脱落大悟の人であつたから、己が處世の覺悟を以て之に答へ、『夫れ  
 は孫休貴公が根本的に誤つて居るからである。第一其の身を修め、其の膽を練つて、智あり勇ありと思つて居  
 るのが間違ひぢや、夫れ至人は其の肝膽を忘れ、其の耳目を遣る、少々修養したからと言ふて、其れを言外す  
 る様ではいかぬ』爲して恃まず、長じて宰せず』少々善いことを爲しても鼻に懸けず、少々徳を養ふと言ふて  
 も自ら高ぶらず、無理に用ゐられやうと思はれば、又不遇を嘆する暇もないものである。つまり尙た盲や、  
 聾や、跛蹇にならぬのを幸ひと思ふて居るがよい』と論じたのぢや、然し孫休は未だ其處迄達つて居らなかつ  
 た、故に大いに惑ふたのである。由つて同じ論でも『今汝知を飾つて愚を驚かし、身を修めて汗を明かにし、  
 昭々乎として日月を掲げて行くが如し』とある。此の方面を最少し委細く説明して、つまり汝が不遇の罪は餘  
 り力身過ぎて居るからである。水至つて清ければ魚棲まずぢや。徒らに己れを豪しとして人を侮り、彼れは愚  
 物なり、此れは好物なりと、みづから自己の身に日月を掲げて行き、清淨無垢の人間の様に威張つて居る。其  
 れでは君公にも朋友にも用ゐられない。若し夫れ至人と爲つて塵垢の外に彷彿し、無事の業に逍遙して、其れ  
 で樂しんで居ることが出来ぬれば、最少し處世の方面に注意したら何うであらうと論してやつたら、多分大

いに悟つたかも知れないのであつた。然し扁子の説論が、餘り抽象的であつたから、分らなくなつて惑ふたら  
 しい。宗教を語るのも同じ事、學生に説くのも同じ事で、應病投藥の道が大いに心得ねばなりませぬ。イヤ實  
 に扁子の謂ふ通り、鳥に太宰を與へたり、驢を馬車に載せたりして大失策することが幾等もあるものぢや。

孔子と老子 (天運)

孔子見老聃而語仁義。老聃曰。夫播糠眯目。則天地四方易位  
 矣。蚊虻疇膚。則通昔不寢矣。夫仁義。憊然乃憤。吾心亂莫  
 大焉。吾子使天下無失其朴。吾子亦放風而動。總德而立矣。  
 又奚傑然若負建鼓而求亡子者耶。夫鵠不日浴而白。烏不日  
 黔而黑。  
 孔子見老聃歸。三日不談。弟子問曰。夫子見老聃。亦將何規  
 哉。孔子曰。吾乃今於是以見龍。龍合而成體。散而成章。乘  
 乎雲氣而養乎陰陽。予口張而不能言。予又何規老聃哉。

【註一】 播 穰 眯 目 眯は芥の目に入る事。

【註二】 憎 然 貌。然 愛ふる

【註三】 傑 然 貌。然 自ら高ぶ

【註四】 建 鼓 の鼓。建つる所

孔子老聃に見えて仁義を語つた。蓋し五倫五常の見地より「禮を知らずんば立つことなし」の意を述べたのであらう。然るに老聃は微笑を洩しつゝ之れに答へて、夫れ播穰が目に入れば、天地四方も見えなくなる。蚊や虻が膚を刺せば、通昔寝られないこともある。餘り仁義々と驚ましく言はぬが宜しい。仁義の一點張りて人々を責めてゐると却て之れが爲めに目が眩んだり、苦痛を感じる様になる。仁義は畢竟吾心を憤し、かれて人々を不自然に導く虞れのあるものぢや。天下の民をして朴訥の氣風を失はしめない様に注意するがよろしい而して吾子は只だ眞是れ養ひ、無爲の風に放りて動き、無言の徳を總て立つがよろしい。そんなに傑然と騒ぎ立ち、太鼓を叩いて亡子を尋ねる様な事をしたところで、天下を治め、人心を化するには効能があるまい。夫れ鶴は日々浴せぬも白く、烏は日に黔せざるも黒し。道は自然と人間に備はつて居るものぢや。其れをヤレ仁義ぢや、五常ぢや、斯うせよあゝせよと無暗に規律を作爲して驚しく謂ふから、天下が益々亂るゝのであると喝破した。

於レ此乎、孔子は歸りて三日談はなかつた。ソコテ弟子が怪んで夫子は老聃を御覽になつたか、如何なる人でござつたと尋ねると、吾れは初めて龍と云ふものを見た。夫れ龍は合して體を成し、散じて章を爲し、雲氣に乗り陰陽に養はる、予は口を張ても嚼ふことが出来なかつた。何んと云ふて良いか分らないと答へたのである。

曰く何教、曰く何法、曰く何律、曰く何式、曰く脱帽、曰く敬禮、曰く何、曰く何と、而して民心を偽善に驅るものは是れ人間社會の通弊にあらずや、於レ此乎ニ一チエ起り、自然主義出で、更に實利論者に勢授し來る。嗟呼仁義を説くも可し、説かざるも亦た可し。酒飲むべからず。亦た飲むべし、舉禮以て天下を匡すべく亡禮以て民心を收むべし。老子の意たるや、必ずしも放漫に流るゝにあらず。唯だ彼天眞に處して道を行るを謂へるのみ。所謂天龍の時に變するもの、流石は孔子之れを觀たり、而かも徑々たる子貢の徒は畢に悟する能はざりき。嗟呼今日の宗教家、教育家、若しくは政治家にして、能く此極意を得るもの幾人ぞ。

(莊子終り)



# 列子

列子 (天瑞)

孔子遊於太山。見榮啓期行乎郕之野。鹿裘帶索鼓琴而歌。  
 孔子問曰。先生所以樂何也。對曰。吾樂甚多。天生萬物。唯  
 人為貴。而吾得為人。是一樂也。  
 男女之別。男尊女卑。故以男為貴。吾既得為男矣。是二樂也。  
 人生有下不見日月。不免襁褓者。吾既已行年九十矣。是三樂也。  
 貧者士之常也。死者人之終也。處常得終。當何憂哉。  
 孔子曰。善乎。能自寬者也。

【註一】鹿裘帶索 鹿裘とは鹿の皮衣、帶索とは繩の帶のこと。

【註二】襁褓 赤子のむつ

有下不見日月。不免襁褓者。上之。日月も見ず、赤子で死んで了ふものも有るとのこと。

【註三】自寬者 悠々、寛々と天下をわたり居る貌。

編者曰。貧乏して居ても、こんな心で居れば、感謝の生涯を送つて居る事が出来るぞとの事。

## 黄帝第二

我養虎之法。凡順之則喜。逆之則怒。此有血氣者之性也。  
 然喜怒豈妄發哉。皆逆之所犯也。  
 夫食虎者不敢以生物與之。為其殺之怒也。  
 不敢以全物與之。為其碎之怒也。  
 時其饑飽。達其怒心。  
 虎之與人異類。而媚養己者。順也。  
 故其殺之逆也。  
 然則吾豈敢逆之使怒哉。亦不順之使喜也。夫喜之復也必

怒之復也常喜。皆不中也。

今吾心無逆順者也。則鳥獸之視吾猶其儕也。

【註一】時二其儕。儕とは友人のこと。虎のやうな奴でも、取り扱ひ其儕一也。次第によつては友達になるぞとのことである。【註二】視レ吾猶ニ其儕ニ。之は怎すれば怒るか、怎すれば喜ぶか、其の儕の時、飽く時の心的状態を察して、取り扱ふ事。

同

宋有狙公者。愛狙養之成羣。

能解狙之意。狙亦得公之心。損其家口充狙之欲。俄而匱焉。將限其食。恐衆狙之不馴於己也。

先詆之曰。與若芋。朝三而暮四足乎。衆狙皆起而怒。俄而曰。與二若芋。朝四而暮三足乎。衆狙皆伏而喜。物之以能

鄙相籠皆猶此也。

聖人以智籠羣愚。亦猶狙公之以智籠衆狙也。

名實不虧。使二其喜怒一哉。

【註一】狙。猿のこと。【註二】損ニ其家口。貧乏だから、家の食物を減らしてまでもやること。【註三】名實不レ虧。と云ふ名も、實際の處も同じ事であること。【註四】籠。籠絡の籠である。【註五】能鄙。能とは利口な奴、鄙とは馬鹿なもの。

編者曰。猿を澤山飼つて居たが、貧乏だから家の食物を減じてまで猿にやつて居た。しかし夫れも出来なくなつたから、朝三ツ夜四ツやつたら猿は怒つた。故に朝四ツ夜三ツやつたら喜んだ。食物の量は同じ事だ。しかし猿から見ると、朝三ツ夜四ツよりも、朝四ツ夜三ツの方がよいのだ。そすと名實虧けすで、名も實の事も同じで、喜怒を別にする。妙なものだが、知者が愚者を使ふ心得は、先方の嗜好や、其の心的状態を察してやれば百事都合よく行くべしとの事。

周穆王第三

宋陽里華子。中年病忘。

朝取而夕忘。夕與而朝忘。在塗則忘行。在室則忘坐。今不識

先後不識今。

闔室毒之。謁史而卜之。弗占。

謁巫而禱之。弗禁。

謁醫而攻之。弗已。

魯有儒生。自媒能治之。

華子之妻子。以居產之半。請其方。

儒生曰。此固非卦兆之所占。

非祈請之所禱。

非藥石之所攻。

吾試化其心。變其慮。庶幾其廖乎。

於是試露之。而求衣。饑之。而求食。幽之。而求明。

儒生欣然。告其子曰。疾可已也。

然吾之方密傳世。不以告人。試屏左右。獨與居室。七日。從之。

莫知其所以施為也。

而積年之疾一朝都除。

華子既悟。迺大怒。黜妻罰子。操戈逐儒生。

宋人執而問其以。

華子曰。曩吾忘也。蕩蕩然不覺天地之有無。今頓識。既往數十

年來存亡得失。哀樂好惡。擾擾萬緒起矣。

吾恐將來之存亡得失。哀樂好惡之亂吾心。如也。此也。

須臾之忘。可復得乎。

子貢聞而怪之、以告孔子。孔子曰：此非汝所及乎。願謂顏回一紀之。

【註一】 謂、聘する。 【註二】 弗、占。八卦に出ないこと。 【註三】 弗、禁。己の力に及ばぬこと。

【註四】 弗、已。治らぬ。 【註五】 自、媒。自ら紹介して来たこと。 【註六】 居、産。財産のこと。

【註七】 露、之。裸にする。 【註八】 幽、之。暗い處に置くこと。 【註九】 蕩々、然。ホーツとして大きな貌。

【註十】 擾々、起る貌。

編者曰。此の華子の理窟が中々面白いのだ。然し此の話を聞いて子貢が、恁んな馬鹿な話がありますと、孔子に告げた處が、孔子が感心して、あゝそうか、お前は之を馬鹿にするが、お前のやうな未だ理窟云ふ奴には解らない。顏回のやうな、默識の者で無ければ解らんと云ひ、顏回に命じて、斯う云ふ面白い奴が居つたと云ふ事を、後世に傳へる爲め、記して置けと云つたのである。讀者諸君にも一寸此の深い處と、面白味が解るまい。先づ公案として此處に載せて置くのぢや。

仲尼第四

孔夏問孔子曰：顏回之爲人奚若。

子曰：回之仁賢於丘也。

曰：子貢之爲人奚若。子曰：賜之辨賢於丘也。

曰：子路之爲人奚若。子曰：由之勇賢於丘也。

曰：子張之爲人奚若。子曰：師之莊賢於丘也。

子夏避席而問曰：然則四子者何爲事夫子。

曰：居吾語汝。夫回能仁而不能反。

賜能辨而不能訥。

由能勇而不能怯。

師能莊而不能同。

兼四子之有以易吾。吾弗許也。

此其所以事吾而不貳也。

【註一】 回。顏回の。 【註二】 賜。子貢の。 【註三】 由。子路の。 【註四】 師。子張の。

【註五】 莊。莊嚴の莊で、何となく重々しい、有難いやうな相貌態度のこと。 【註六】 不能反。あたははんスル仁一方で、時と場合に應じて變化する能はざること。

【註七】 同 老子の所謂和光同塵で、ま

編者曰。仁もよいが、時とすると、所謂る權道で、不仁と見える事もしなければならぬ。其れが顔回には出來ない。辯もよいが、訥でなければならぬ時もある。勇もよいが、怯なければならぬ時もある。莊もよいが時とすると老子の所謂和光同仁で、まことに打ち解けた爾我の交をせんければならぬ時もある。易ふるは吾なりで、時と場合に應じて變化さすのは俺だ。之はまだく四子はようやらない。之れが俺に閉口して事へて二心ない所以だとの事。

仲尼第四

堯 治天 下五十年。不知天下治歟 不治歟。

不知億兆之願戴己歟。不願戴己歟。

顧問左右。左右不知。問外朝。外朝不知。問在野。在野不知。

堯乃微服游於康衢。聞兒童謠。曰。立我蒸民。莫爾極。不識不

知順帝之則。

堯喜。問曰。誰教。爾爲此言。童兒曰。我聞之。大夫。

問大夫。大夫曰。古詩也。

堯還宮。召舜。因禪以天下。

舜不辭受之。

關尹喜曰。在己無居。

形物其著。

其動若水。

其靜若鏡。

其應若響。

故其道若物者也。

物自違道。道不違物。

善若道者。亦不用耳。亦不用目。亦不用力。亦不用心。

欲若道。而用視聽形智。以求之。弗當矣。

膽之在前。忽焉在後。

用之彌滿六虛一廢之莫知其所以

亦非有心者所不能得遠亦非無心者所不能得近

唯默而得之而性成之者得之

知而忘情能而不爲真知真能也

發無知何能情發不能何能爲

聚塊也積塵也雖無爲而非理也

【註一】左右始終己の傍に居る者 【註二】外朝外に居る者 【註三】在野各地に居る百姓

【註四】康衢四辻のこと 【註五】蒸民國民のこと 【註六】爾極實に道の極意と云ふこと

【註七】大夫の御役人 【註八】在己無レ居自身が斯うしなればならんと思はぬこと 【註九】六虚六合のこと

【註十】衆塊土のかたまり 【註十一】積塵塵のかたまり

湯問第五

殷湯問於夏革曰

古初有物乎

夏革曰古初無物今惡得物

後之人將謂今之無物可乎

殷湯曰然則物無先後一乎

夏革曰物之終始初無二極已始或爲終終或爲始知二其紀

【註一】殷湯殷の湯 【註二】夏革その大 【註三】其紀締めくくりの事それが始め、これが終りと決つて居る事

編者曰。列子は、仲々深い、面白い心理を云ふが、然し天地萬有の大原因に至つては、こう云う漠然たるものだ。まことに幼稚なものだ。無始無終位が解つて居て、西洋哲學の如くモ一ツ奥をよく研究して居ないことを知らず爲に之れを掲ぐるのである。

力命第六

桓公遂霸管仲嘗嘆曰吾少窮困時嘗與鮑叔牙一賈分財多

自與鮑叔不以我爲貧知我貧也

吾嘗爲二鮑叔一謀事而大窮困。鮑叔不以我爲愚。知三時有二利不利也。

吾嘗三仕三見遂於君一鮑叔不以我爲不肖一知二我不遭時也。

吾嘗三戰三北。鮑叔不以我爲怯。知三我有二老母一也。

公子糾敗。召忽死之。吾幽囚受辱。鮑叔不以我爲無耻。知下我

不羞二小節一而耻中名不顯於天下也。

生我者父母。知我者鮑叔也。

【註一】多自與 自分で餘計に取ること。

【註二】公子糾 名は糾で公子である。

【註三】召忽 味方の猛將。

編者曰。之は管鮑の交と云つて、支那より日本に傳つて、よく友情の例にひくものである。管仲は斯う云ふ失敗もし、疑ふべき行動もした。けれども其の心友たる鮑叔牙は、よく其の心を知つて居たので、少しも疑はず、其の心を解してこれと交つた。乃ち知己であつた。眞の朋友はかくありたきもの、尤も列子は老子と同様、其の言を聞くのでなく、其の行を見るのでなく、其の心を知ると云ふ所に、意を用ゐたが、この心を知ると云ふ處が大切なのだ。その心を知らんと、その友情が、却つて己を馬鹿な目に遣はずぞ。

說符第八

宋人有下好行仁義者。三世不懈。家無故黑牛。生白犢。以問孔子。

孔子曰。此吉祥也。以薦上帝。

居一年。其父無故而盲。

其牛又復生白犢。其父又復令下其子一問孔子。

其子曰。前問之而失明。又何問乎。

父曰。聖人之言先達。後合。其事未究。姑復問之。

其子又復問孔子。孔子曰。吉祥也。復教以祭。其子歸致命。

其父曰。行孔子之言也。居一年。其子又無故而盲。其後楚攻

宋圍其城。民易子而食之。析骸而炊之。丁壯者皆乘城而戰。死

者太半。此人以二父子有疾皆免。及二圍解而疾俱復。

【註一】 饋 事。子の

【註二】 薦 上 帝 一 へ物する事。

【註三】 先 迄 後 合 先には

たと思ふが、つまり

【註四】 未 究 云ふ事。

【註五】 致 命 取りついで事。

【註六】

易レ子而食レ之 自分の子は可愛いから食はれぬから、  
お互に交換し合つて食つたと云ふ事。

【註七】 疾 めく

編者曰。之れは養翁が馬と同じ喩である。一寸面白いから此處に掲ぐ。

說符第八

秦穆公謂伯樂曰。子之年長矣。子姓有可レ使レ求馬者乎。伯樂對曰。良馬可下形容筋骨相上也。天下之馬者。若レ滅若レ沒若レ亡若レ失。若レ此者。絶塵踴。臣之子皆下才也。可三告以良馬。不可三告以天下之馬也。臣有所二與共擔糶薪菜者。有九方臯。此其於馬非臣之下也。請見之。穆公見之。使二行求馬。三月而反報曰。已得之矣。在沙丘。穆公曰何馬也。對曰。牝而黃。使二人往取之。牡而驪。穆公不

說。召伯樂而謂之曰。敗矣。子所使求馬者。色物牝牡尙弗能レ知。又何馬之能知也。伯樂喟然大息曰。一至於此乎。是乃其所以千

萬臣而無數者也。若臯之所觀天機也。得其二精而忘其二。在二其内而忘二其外。見二其所見不見二其所不見。視二其所視而遺二其所不視。若臯之相者。乃有下貴乎馬一者也。馬至果天下之馬也。

- 【註一】 子 姓 家前の
- 【註二】 滅、沒、亡、失 此れはボンヤリした、馬鹿みたやうな貌。
- 【註三】 絶 絶レ塵彈レ蹴
- 【註四】 糶 糶の事。
- 【註五】 薪 薪や野菜を擔て行く
- 【註六】 敗 敗れ矣
- 【註七】 一至於此乎 其れ程までになつて居りますか。
- 【註八】 千二萬臣一而無レ數者 千萬にして、見當がつかない者との事。
- 【註九】 天機 無形の
- 【註十】 相 馬を見

編者曰。之れは老莊論談に入れたのだが、老莊に無くして列子より取つたのだから。此處に入れて置く。伯樂は馬を觀る名人である。一日秦の穆公が伯樂を召されて、さて伯樂お前も餘程年を取つた。一ツお前の後繼者を拵えて置いて貰ひたい。どうぢやお前の家の者に馬を求めしむる者があるかと仰せられた。スルト伯樂が答へて、左様で御座います。馬に良馬と天下の馬と、此二ツが御座います。良馬なれば、凡そ形容



や筋骨で分りますが、天下の馬に至ると、却々形容や筋骨では分りませぬ。一寸見ると滅するが如く、没するが如く、亡するが如く、失するが如く宛て馬鹿の如く、頓間の如く、扱作の如く、チト足らない様に思はれますが、然し去來此れからと申す時になると、塵を絶ち跡を弭む、所謂る天馬空を行く有様で、其跡も形も見えるものでは御座りませぬ。臣の子は皆下材で、良馬ならば求めさすことが出来ませんが、天下の馬は、到底求めさすことは出来ませぬ。即ち之を観ることが出来ませぬと申上げた。

曰く暗記、曰く試験、曰く登用、曰く應賞、曰く爵祿と、凡そ今日の成功者は、皆此の良馬たるを志すものにあらざるはなし、而して彼れ天下の馬に至りては之を養成するものあらず、又た之を任ずるものも極めて尠し。維新豪傑の士と今日の高襟紳士との別、夫れ唯だ斯に在る歟

然しながら臣の同伴に、九方阜と申ものが御座ります。此れは臣の子と違ひ、馬を観ることは、却々臣の下には居りませぬ、之を推薦仕るにより、早速之をお召になれば宜しからうと云ふ。ソコで穆公が之を召して馬を求めさすと、還り報じて、御命に従ふて馬が見つかりました。沙丘さ申すところに御座りますと申上げたから、ごんな馬ぢやと御尋ねになると、左れば牝で黄な馬で御座りますと答へた。ハテ變なことぢや、牝では仕方があるまいと思はれたが、先づ人を遣して其馬を取り寄せられると、牡で驪色であつた。於此乎穆公は大に怒つて、早速伯樂を召し出し、何んの事じや、貴様の推薦した男は、馬の牝牡さへ分らない大間扱でないか、何故あんなものを推薦したかとお叱りになると、伯樂は大息して、嗟呼左様で御座つたか、實に恐れ入つた。豫れて九方阜は豪い奴ぢやと思ふて居りましたが、其れほど迄に豪くなつて居るとは思はなかつた。左れば彼れは臣の下にあらざる位でなく、臣に優ること千萬倍で御座る。彼れの觀るところ牝や牡

や色ではない、彼れの觀るところは天機を觀るのである。即ち其神魂を觀るのである。而して已に其神魂を觀た以上は、其餘の事は皆忘れて仕舞つたのである。嗟呼恐れ入つたことぢやと申上げたたら、ソコで其馬を試みて見ると果して天下の馬であつた。

カーライル曰く、書を読む、宜しく其著者の神魂を讀むべきなりと。能く演じ能く説く、而かも人格卑劣なるものあり、能く書き能く辯ず、而かも曲學阿世の徒之れ無きにあらず。誰か能く駭天の神魂を養ひつゝあるものぞ。誰か能く此の天機を看破し得るものぞ。今や天下の馬の、勢きのみならず、又た此天下の馬を沙丘に扱き、之をして絶塵の偉功を樹てしむるものも亦た尠し。齊彬公何處に在る、大西郷何處に在る。

說符第八

楊朱之弟曰布。衣素衣而出。天雨。解素衣。衣緇衣。而反。

其狗不知。迎而吠之。

楊布怒。將扑之。

楊朱曰。子無扑矣。子亦猶是也。

嚮者使汝狗白而往黑而來一豈能無怪哉。

【註一】素衣白着。【註二】縞衣黑着。

編者曰く。之れはみだりに人のことを笑ふな、汝も地を換へれば皆同じ事でないかと云ふこと。

說符第八

楊朱曰。行善不以爲名而名從之。名不與利期。而利歸之。利不與爭期。而爭及之。故君子必慎爲善。

編者曰く。之は平々凡々だが、一寸言語文字が面白い。つまり、名利を離れて善い事をして居れば、名利は求めなくとも來るとの事。

說符第八

昔人有言。有下知不死之道者。燕君使人受之。不捷而謂者死。燕君甚怒。使其使者將加誅焉。幸臣諫曰。人所愛者莫急乎死。己所重者莫過乎生。彼自喪其生。安能令君不死也。乃不誅。有二齊子亦欲學其道。聞言者之死。乃撫膺而恨。富子聞而笑之。曰。夫所欲學不死。其人已死。而猶恨之。是不知所以爲學。胡子曰。富子之言非也。凡人有所不能行者。有矣。能行而無其術者。亦有矣。術人有善數者。臨死以訣諭其子。其子志其言而不行也。他人問之。以二其父所言。告之。問者用其言而行其術。與其父無差焉。若然死者。奚爲不能言生術哉。

【註一】不捷。早く聞きに行かない事。【註二】幸臣。氣に入りの家來。【註三】數。數字の事。

【註四】訣。秘訣の事。

編者曰く。之も老莊書論に入れて置いたのであるが、列子にあるのだから、此處に掲げておく。  
 古昔燕の國に不死の術を知ると云ふ者があつた。人の厭ふは死であるから、誰れも彼れも皆不死の術を得んとて、毎日々々其處へ詰めかけた。スルト爰に齊子と云ふ人が、之を聞いて、其れは實に有難き事である。予れも亦た行きて不死の人たらんと、懸々遠方より出掛けて参りましたが、調度到着する前の晩に、其不死の術を教へると云ふ先生が、不意に頓死して仕舞つて居た。ソコテ齊子は大失望で、嘆息して「ア、仕舞たも一日早かつたら不死の術を教へて貰はれたのに、誠に残念な事を致した」と申しました。  
 何と面白い話してはないか、不死の術を教へて居た先生が死んで仕舞つたのだ莫迦々々しい。人に不死の術を教へる位なら、自から死すべき筈はないのである。然し又更に之より莫迦々々しきは、其人の死だのを聞き「ア、残念である。モウ少し早かつたら其術を聴くことが出来るのであつた」と嘆息した齊子と云ふ野郎の間抜けさ加減である。兎は云ふものゝ諸君よ。敢て此教師を督り給ふな。又敢て此の齊子を笑ひ給ふな。滔々たる世上の説法者多くは皆是れである。彼等は安心立命を説けども、己に自得するところがないから、所謂口頭の禪、耳口の學ばかりで、サツパリ其身の實際とは違つて居る。  
 爰に又一ツの話がある、即ち前申す通りにして、齊子が口惜がり、人々が之れを笑ふて居ると、胡子と云ふ奇想家が出て来て、イヤ〜其様に笑ふものでない、凡そ術を知つて居ても之れを行ふことの出来ざるものがある。又之を行ふことが出来ても、其術を教ゆることの出来ないものもある。古昔衛人に數を善くするものがあつたが、死ぬるとき、其子に其術を教へた。然し其子は其術を知つて居るばかりで、一向其術を行ふことが出来なかつた。スルト一日或人が之れを聞いて、懸々其子に其術を傳受に來たが、此人は其術を聴く

と同時に直ちに其術を行ふことが出来たと云ふから、此方さへ其器であれば、たとひ説くものは之れを實際に行ふことが出来ずとも、之れを聴いて大に發明することのあるものぢやと云つたが、是れも又た一段の見識である。

或時我輩に、佛書にある「隨處に主たれば、立處皆眞」と云ふことを教へた人があつたが、我輩も其時已に「I am I, not a bit more or less.」位の自主論は心得て居たが、之れを聴いて又た今更の如くに感服し、成程、一句の中に善くも獨立の大眞理を教へたものであると思ひ、自分は如何なる場合に臨んでも、何時も此一句を服膺して、之を自身の本尊と爲して居るものであるが、さて之れを教へた先生は如何であるかと云ふに、兎角意志力弱くして、之れを知つて居るも、行ふことが出来ぬと自白して居た。如此云ふと何んだか、僕ばかりが豪相になりて、其だ讀者に相濟まぬが、然し是れも亦た單に其術を脱くものと心得て、其間より各々自ら實際自得の材料を採り給ふたならば、敢て予輩を尤むることもあるまい。

說符第八

人有亡鐵者。  
 意其鄰之子。  
 視其行步竊鐵也。

顔色 竊鐵也。

言語 竊鐵也。

作動態度 無爲而不竊鐵也。

俄而扣其谷一而得其二鐵一。

他日復見其鄰人之子。

動作態度 無似竊鐵者。

編者曰く。之は所謂色眼鏡で見ると、斯んな間違が起るとの事。文章が面白いから之を探る。

說符第八

昔齊人有欲金者。

清旦衣冠而之市。適鬻金者之所。因攫其金而去。

吏捕得之。問曰。人皆在焉。子攫人之金。何。

對曰。取金之時。不見人。徒見金。

【註】清且夜明けの暗い中。

編者曰く。之が列子の最後の文章である。金が欲しい、金が欲しいと思ふて居ると、何も他の事を考へない、己の縛らるゝ事をも考へない、傍に人の居る事も考へない。縛られて始めて目が覺めて、悔しがる馬鹿者を戒めたのである。金が欲しい、金が欲しいと云つて、朝から晩まで奮闘努力とか、一生懸命とか、額に汗すとか云つて、狂奔して居るが、つまり何を待たか。月が照つても其を見ることが知らず、花が咲いても、之を眺めることを知らぬ、雪を賞することも無く、紅葉を愛することも無く、自然には盲目となり、義を知らず、情を知らず、人を助ける悦びを知らず、世を濟ふ立派な心をも覺らず、只塵に塗れ、人に怨まれ、義理を缺く、友を陥れ、そしてつまり其のまゝ死んで了ふ。いや、其れ迄に疑獄を起して牢に入る、家族を泣かしめる、人から笑はれる、丁度この齊人に類せざる者、今日の日本に夫れ果して幾人がある。

(列子終り)

「道會」老莊列終

昭和三年十二月十五日發行  
昭和三年十二月十二日印刷

定價 金六十錢  
(送料金二錢)

不許

編輯者 松村介石

東京市外濠谷町原二七番地

發行者 香山吉助

澁澤市中區福富町仲通三八番地

複製

印刷者 間瀬寛吉

發行所

東京市外濠谷町神山五九番地  
振替東京二五九二六番

道會事務所

320  
207

終